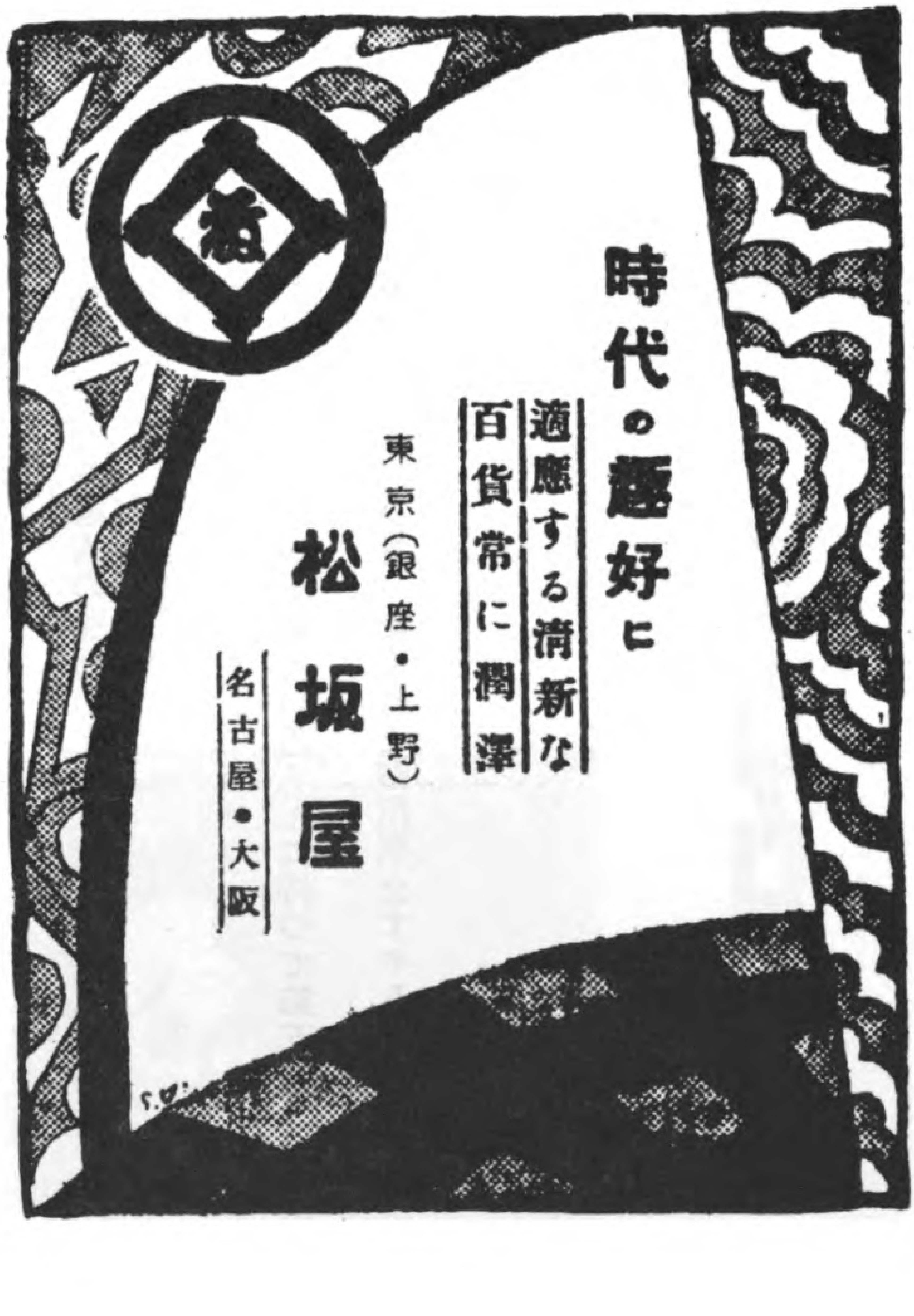
1月號

婦人運動

第5巻第1號



職業婦人社發行


時代の趣好に
適應する清新な
百貨常に潤澤
東京（銀座・上野）
松坂屋
名古屋・大阪

社會的にみてことしは特に私たち婦人の生活の上に意義多い變化と收獲とを期待すべき年のやうに考へられます。

この際わが「婦人運動」社では、新しい企圖をいろ〳〵に持つて第五卷の春を迎へました。私たちが倍舊の意氣と力で思ひきり働くことが出來ますやう、どうぞ相變らずお力添へ下さいませ。

正月元旦

職業婦人社

「婦人運動」社

―巻頭詩―

[illegible]

夜が明ける
黄金をもつて東の空がすばやく身づくろひをする
目を覚ました風が未だ眠つてゐる森に私語く
その緑色の外套のなかで
朝になつた喜びの匂ひが嗅ぎわけられる
明けゆく大空と共に
君者もまた立ちあがる
若ひぼけた古松の森だけは
不精無精、か弱い吐息をつく
かれの結れた捲髪は
赤色の小川に沈んでゆく

―ヴエ・トルスキイ―

一月號婦人運動 第五巻第一號 目次

年初のことば

山川菊榮

男子は五十年も以前にチョン髷を切り落したが、婦人はそれに相當する封建的遺物である島田や丸髷を今なほ平氣で頭の上に載せてゐる。男子の外出着仕事着は洋服と相場が極つたが、婦人は外出にも勞働にも、封建的な家庭生活の鈍重と不活潑を象徴するような裾の長い、袖の重いキモノと、胸を壓迫し、身體の自由を妨げる幅廣の帶から解放されることが出來ない。

□

この外見の相異は、同時に男子と婦人との頭の中の違ひを現はしてゐる。一方が散切頭に作業服をつけてマルクスを論じ、レーニンを語る時、一方はその祖母娘時代と同じように、銀杏返しに黑繻子の襟のかゝつた着物を着、美しい前垂をしめて衣裳髮かざりの品評に時を移す。男の勞働者は未來の社會を夢み、勞働婦人は過去の夢に耽つてゐる。勞働階級の男子と婦人との思想は約一世紀を隔てゝ相對してゐる。

この一世紀の差を踏み越えること、これが現在無産婦人の爲さねばならぬ急務である。

□

ブルジョア婦人は疾に目覺めて參政權を要求し、教育、職業の平等を要求してゐる。然るに婦人としてのみならず、更に生産者として二重の隷屬の下にある無産婦人は、昔ながらに、家庭と男子とに賴るより外のことを知らない。彼女らは激しい嵐の最中を衝き進む無産階級の乘合船の一員としての地位を覺らず、舵を取る男達の逞ましい腕に全身の重みをかけてその働らきを鈍らすことを意としない。婦人の覺醒婦人の階級的自覺は戰ひつゝある男子の腕から其重荷を取去るのみならず、更に新なる味方の倍加することを意味する。回教國の婦人達はその隷屬を代表した面布をかなぐり捨てゝ解放の戰線に參加した。日本の無産婦人はいつその長い袂、重い裾を切り捨てゝ男子と歩調を合せて進むことが出來るであらうか。

無產政黨は婦人に對して
どんな具體案を持つか

社會民衆黨と婦人問題

片山哲

□

我社會民衆黨は結黨式に於て發表されたる政策を先づ實行するつもりである。無產政黨として掲ぐべき政策は此の外に數多くあるけれども、我等は差當つて緊急を要する事項を目標として勇敢に實行性を以て進む必要を考へた。から、婦人問題に關する事項も全部を網羅する事が出來なかつた、然し乍ら目下我國の現狀に於て、社會民衆黨として爲すべき事項は、政策中決して遺脫して無いつもりである。

□

我國では女子に對する封建的取扱ひが今尚ほ盛んで、女子を奴隷視する觀念、風習が可成り强く印せられてゐる。

人道上許す可からざる制度、事項でも平氣で行はれて居るに徴しても明かである、是等に就ても既成政黨は何等なす處なく自然に放任してゐる狀態であつた。即ち公娼制度の廢止の如き、或は封建的戸主萬能の制度の如き、既成政黨の行ふべき新政策でありながら、反つて彼等は全々それに反對せる主義、方針をとり公娼存置論を堂々と議會に於て論ずるが如き愚を敢てしてをつたのである。無產政黨は、資本主義制度の害毒から一般國民を救濟して、國民生活の安固を計る使命を以て生誕した

ものであるが、我國の現狀に於ては、資本主義の害毒を驅除すると同時に、封建主義の殘骸をも同時に一掃しなければならぬ責務を以つてゐる。外國では無產政黨の使命は、單純に資本主義の牙城を突くにあつたから、其の立場はきはめて明白であるが、我國無產政黨は特種の國情から其の政策をも考察してゆかなければならぬ。社會民衆黨は此の意味に於て、我國特有の封建的舊制度の改廢を計りつゝ婦人問題の解決に努力するつもりである。

□

先づ我黨は、普通選擧の徹底を冒頭に掲げてゐる。男子女子共に成年に達せる時期を以つて選擧權ありとするのが普通選擧の眞意であるから、當然婦人參政權を主張するのである。この事については敢て喋々を要しない所である、即ち政事上に於ける男女の差別を撤廢し、次で文官任用令を改正し、政事的地位を女子に開放せんことを主張するのである。殊に敎育行政事務につき、女子を排斥する理由を我等は發見する事が出來ない、女子敎育行政は、女子をしてその中樞に參與せしむるが至當の事であるが故に、我等は普選の徹底について、これら一般行政機關の改革、即ち特に女子にこれ等を開放すべしと主張するものである。

我黨は又、女子の社會的地位の向上を計る爲めに、女子の奴隸的待遇の禁止を主張する。卽ちかの弊害多き公娼の廢止、女工の夜業禁止、女坑夫の坑內勞働の禁止、女工寄宿舍の改善等を主張實行する。公娼廢止以外の事項は、女子の經濟的地位の向上を計る事項であつて、それは或は工場法の改正、團結權の確立等と相關連する事であつて、女子のみの問題ではないかも知れないが、我國の現狀は、あまりに封建的であるが爲めに、女子の奴隸的待遇の改善を主張する意味に於いて特にこれを高潮する所以である。若しそれ公娼廢止に至つては、全々議論の餘地のない惡制度で、既成政黨も之を考へなければならなかつた程明白な非人道的、非社會的問題であるが、我等は之をも實行しなければならんのであるから、無產政黨の任務や又多忙なりといふべしである。

□

我黨は又女子の法律的差別待遇の撤廢を主張する。經濟的差別待遇、或は社會的差別待遇は、女子の實力向上によつて次第次第に、改善せられ得るものである。例へば今迄育兒と炊事に沒

頭して居つた婦人も、だん／＼會社、學校、勞働へとそれぞれ活躍する様になつて來た。社會の荒波は婦人をして臺所から街頭へと進ましめた。經濟的地位は斯樣に實力次第でだん／＼進展打開し得るものである。然しながら、法律的地位に至つては、實力に依つてのみは打開せられるものではない、必ず或る人爲的作爲を以つて其地位を改善しなければならぬ、妻は法律上無能力者なりといふ我が民法の規定は、如何に妻が實力を養成し能力者になつたといへども、その規定は改廢せらるべきものではない。たゞ其の規定を置き去りにして、妻は事實上の能力者となるけれども法律上の無能力規定は依然として殘存してゐる。此の置き去りにせられたる、時代に添はない規定を改廢する事が我黨の緊急婦人問題解決の主張である。其他私生兒制の廢止、養子制の廢止、結婚法の改正、妻の財産權確立、相續法の改正等、婦人法制改正の問題は山積してゐる。社會民衆黨は親族法、相續法の改正に努力するつもりである。

□

我黨は又無産婦人保護法の制定の急務なる事を主張する。炊事と育兒は婦人の務なりと云ひながら、子供を充分に育てる事の出來ない氣の毒な家庭の爲めに、母子保護法の制定の必要を設くものである。子供國有の實をあげる爲めに、國家が子供を救濟保護する法律を制定の必要を提唱する。其他出産法、敎育法の制定、健康保險法の完備等婦人兒童の社會法制の必要を痛感し、婦人開放の爲めに努力せんとするものである、是等に關連する事項にして論ずべき問題多しと雖もそれは他日新ためて記述する事にしやう。

勞働農民黨と婦人問題

細迫兼光

一

勞働農民黨は勞働者農民俸給生活者小賣商人等無産階級全體の利害を代表するものであるから特別に所謂婦人問題を婦人問題として取扱ふものではない。然し其れが無産階級の利害に關す

る限り此れを無産階級の問題として取扱ふものである。即ち勞働農民黨は其の政策に於て種々無産階級の利益を要求してゐる。例へば戰死、廢兵、徴兵に依る本人並に家庭の窮乏に對する國家扶養の實施、或は耕作權の確立、最低賃銀法の制定、失業、疾病、養老、災害保險制度の制定等を揭げてゐるが皆無産階級婦人の利害に關してゐないものはない。此の點に於て我等は元來男子女子の區別を眼中に置かず只資本家階級と無産階級の區別をのみ視てゐるといふべきである。然し强いて婦人のみに關する要求として我が勞働農民黨の揭ぐる要求を求むれば、

一、少年及婦人の夜間勞働、坑内勞働及危險作業の禁止

一、女子の公法上及私法上に於ける差別の撤廢

一、女子人身賣買の禁止

一、女子教育及職業に關する一切の制限の撤廢

等を擧げ得る。

□

1 少年及婦人の夜間勞働、坑内勞働及危險作業の禁止

少年及び婦人の身體的保護は未來の國民の保護を意味する。然し之も一見明かなる如く勞働制限であつて無産階級婦人の利益を主張したものである。此の要求を表面的に見れば婦人の職業を制限するものであるかの如き觀を呈してゐるが、其の趣旨は全々異る。此の制限あるとも、同一能率勞働に對する同一賃銀、或は生活の安定を求むるといふ樣な他の要求がその憂を消すのである。

2 女子の公法上及私法上に於ける差別の撤廢

資本家階級の作つた法律は資本家に有利、男の作つた法律は男に有利、是非もない事といつて了へば其れ迄だが、我等は何時までも之に默從してゐる事は出來ない。現在婦人の差別待遇の法律上の現れとして我々は刑法に於ける姦通罪、或は私法上の能力に關する規定等を見ろ、殊に選擧法に於ける差別待遇は全無産階級にとつて重大なる不利を負はしてゐるものであつて、之は單に婦人問題としてのみ取扱ふ事の出來ぬ問題である。

3 女子人身賣買の禁止

此れは女子に限る事ではないから、「女子」の文字を除けといふ說が黨内に出てゐる。人身賣買なるものは人道上の立場からも絕對容認し難きものたるは宗教關係の團體がヤッキになつてゐ

る運動をまたずとも明かなる事である。而して尚ほそれが殆んど全部無產階級に屬する婦人の問題たるに思ひ及べば、無產階級の政黨たる我々が之を傍觀するといふ事はあり得ない。

4　女子教育及職業に關する一切の制限の撤廢

女子は今教育に職業に種々なる制限を社會的に法律的に受けてゐる。此れは女などに學問は要らぬとの古い思想から出て來た事であるが、我々は其の理由なき事を確信するのみならず、却つて教育に付いては積極的によき教育を授ける必要を痛感するものである。何となれば將來の國民を日常主として教育するものは母である。此の意味に於ても、又女子夫れ自身の爲めに教育の機會均等は無產階級として絕對に必要である。職業の制限撤廢の必要は言ふまでもあるまい。

以上大略述べし所によつて勞働農民黨の婦人問題に對する態度を見て戴き度い。(一五、一二、一一)

日本農民黨に就て

佐々木嘉三郎

一

日本農民黨は婦人解放の問題に對して如何なる具體的政策を採る乎と云ふ質問でありますが、其前に日本農民黨なるものが如何なる目的を追求する政黨であるかと云ふ事に就て一言さして戴きます。

日本農民黨はその綱領に於て示すが如く、人類の平和幸福を目標とし合理的新社會を建設せんがために次の諸項を遂行せんとするものであります。

(1)不公平なる政治の弊害を打破し、全無產勤勞階級共同の理想たる社會的正義の實現を期する事。

(2)智識を世界に求め、純眞な我國本を振起し、日本民族の繁榮と、その文化の發達を計り、世界文化に貢獻せんとする事。

(3)議會政策に即し、一切の不合理不自然なる制度組織習慣を排し合理的新日本の建設を期する事。

(4)特異なる日本國情の現實に立脚し、產業の振興、分配の公平を計り、以て國民生活の安定並に向上に力むる

事。

（5）都會中心の不健全なる文化を否定し、健實なる地方的農村の新文化の完成を期する事。

私達の考ふる所によれば、總ての社會運動は、それはブルジョアの社會政策に非る限り、階級的搾取被搾取の關係を廢絶した所の理想社會を終局の目的とし、その目的を追求する事によつて一致點を見出すと思ふものであります。勞働運動も、農民運動も、將又婦人運動も――然してその目的たるや、單なるユトピアンの畫いた幻想でなく、最もサイエンステツクな意味に於て。

更に運動とは常に一貫した主張と行動の上に立たねばならぬものであります。若しも一つの團體が矛盾した二つの思想の上に立ち、二つの目的を追ふならば、即ち言葉を換へて、一貫した行動の上に一定の目的を追ふに非ざれば既にそれは團體としての意義をもたないものであります。

次に私達の運動に對する態度でありますが、それは絶えず『如何にすればこの現實を目的に向はしめ得るか』と云ふ事であつて、この流れて止まない諸々の現象に對しても、不斷に必然妥當の動きを認識把持し、それをある意識に發展せしめんと努力しておるものであります。即ち『如何にすればその解放を可能ならしめ得るか』と云ふ事が根本的態度であつて、かゝる意味に於て、左翼とか右翼とか云ふ比較上の事は問題ではないのであります。

で日本農民黨の社會運動內に於ける地位も右翼とか左翼とか云ふものでなく、日本の無產階級を解放するために最も現實主義的態度をもつて臨んでおると云ふ方が一番適當な見方です。

尙次に問題となつて來るのは、以上の抽象論を離れて、然らば、日本農民黨がその結成糾合し得る範圍に於て、即ち農民にのみによる結成に於て――どれだけの仕事を成し得るかと云ふ事であります。玆にも亦附言しておきたい事は、農民は農民黨へと云ふ理由はかくする事が最も日本の現在にあつて農民を糾合し得るものであると云ふ意味のものであつて、決してその生活程度を同じうする勞働者との離間を劃てゝゐるものでなく、むしろ、その指導精神を同じうする勞働黨あらば喜んで之と提携しようとしてゐる事は、我々がかつて屢々聲明した事によつても明らかであります。無論現在の議會制度內で運動を進めようとするには、農民

がその生活を維持する唯一の源泉である米價の問題等で兩者の利害が相反する場合もありますが、これも生産費に對して國家が補助すると云ふ樣な意味合で兩者が妥協し得るものでありますから大した問題とはなりません。

然し今後の成行きはどう變つて行くものか刻々の事象に對して今からかうなつた場合はかうと抽象的にのみ解說を與へて行かれませんが、或は或過程に於て、二重三重の搾取下に於かれ、都會の勞働者以上に苦しめられてゐる農民の立場をより多く强調する場合もある事と思ひます。それは現在の農民は單なる地主からの搾取のみでなく、更に農業そのものが、商工業の壓迫を受けてゐる事で、實際は我々農民が都會の勞働者と同一線上に立つには未だ々々現在の制度組織を改善しなければならないものであります。此場合婦人運動にあつても或共通點がある事と思ひます。無論共産主義的戰法によつて一時にばつさりやらうと考へてゐる人達とは變つて、我々の政黨運動は漸進的に合法的手段によつて解決しようとするものでありますから、凡てが健實な歩み方をしてゐるとも云ひ得られます。

以上の意味からして日本農民黨は、その農民生活の解放を期する點に於て階級的であり、結成の輪廓から見て職業的であるとも云ひ得られます。無論將來に於て農民の地位が向上すれば職業的な影が淡らぎ行く事は當然で、さうした傾向に進展すべき要素が現在にあつても多く現れております。

□

更に日本農民黨は、右翼も左翼も、勞働者も農民も打つて一丸とする單一無産政黨の存在は日本の現實にあつて不可能であると反對して立つたゝめ當時は社會運動內から異端視された政黨でありましたが今日では、勞働黨の存在と共の必要の可能があると同樣に日本農民黨の存在と必要の可能が一般から認められる樣になりました。

尙、日本農民黨に對する批難はその綱領に於て、一は社會主義的色彩を持ち、一は國家主義的色彩を持つてゐるが、何れが眞かと云ふ事であります。これは一面矛盾の如く見へ、一面日本農民黨が、飽く迄議會政治に立脚すると云ふ綱領と共に他の無産黨に比較しての特色であり、强味であります。し

何是なれば其れに對する私達の答へも亦簡單であります、それは私達が階級的な(經濟上の)搾取被搾取の關係が

なくなつても、法的秩序が必要であり存在すべきものであり、其處に統制があると信ずるからです。

斷片的ではありましたが日本農民黨が大體以上の樣な輪廓のものであると云ふ事を了解せられて、更に本論の日本農民黨の婦人に對する具體的政策の二三を述べて此稿を結ぶ事にします。無論玆で私が淺薄な婦人論をしたとて初りませんから早速政策に就て述べますが、只男女は政治上にも經濟上にも立法上にも同一の線に立たねばならぬこと、然して當面の問題にあつても農村婦人に限らず一般に其點に絶えず留意してゐると云ふ事を述べ本論に入ります。

政策中の政治の部に表れた普通選擧の徹底には女子參政權がふくまれておりますし、經濟の部には婦人勞働の保護制限、社會の部には女人人身賣買の禁止を入れております。未だ〱それ以外に大切な事は婦人解放の上にある事と思ひますが、以上は當面の問題として、然も現在の議會を通じても解決し易いものであると云ふ所から右の三項を挿入した譯です。以上の必要とその理由は今玆で述べる迄でもありませんから、一般的政策を次に記して、日本農民黨なるものゝ如何なるものであるかと云ふ事を知つて戴く事にします。

『政策』

(一)政治之部、

普通選擧の徹底。貴族院の改革。無產階級運動取締に關する諸法令の改廢國防軍備の整理。兵役義務者の給與增額及待遇改善。一般並に地方行政費、行政事務、行政區劃の整理と自治制度の改革。國民外交の確立。移民政策の確立。財產稅の高率累進賦課と關稅及び消費稅の改廢等の稅制の根本的改革恩給制度の改正。

(二)經濟の部

耕作權の確立。土地制度の改革。產業振興策の確立並に我が天然自資開發と生產力增進のための體系的國立調査研究機關の設立。重要農產物專買制實施、農村金融機關の改善及擴張、肥料の國營。農村保護施設の國家的經營。團結權、罷業權、團體契約權の確立。少年婦人勞働の保護制限。工場法の改善及最低賃銀制度の實施。水力電氣の國營。交通機關の整理、並に地方普及。

(三)社會の部

敎育制度の改善。義務敎育費の國庫負擔。國民保健の徹底、病院醫藥の國營。生命、養老、災害、失業、疾病保險の國營。女子人身賣買の禁止。農村文化の普及。(一二、七、八)

日本勞農黨の婦人對策

麻生久

特別に婦人に關する條項としてわが日本勞農黨が持つてゐる政策は、次の、

一、普通選擧制の徹底
一、婦人及滿十六歳以下の少年の夜間勞働、船內勞働、坑內作業、危險作業の禁止
一、女子人身賣買の禁止

等であるが、然し、

一、戰死、廢兵、徵兵に依る本人並びに家族の窮乏に對する國家扶養の實施
一、生活必需品の消費稅及び關稅の徹廢
一、最低賃銀法の制定
一、八時間勞働制の確立
一、敎育制度の改善

その他すべての政綱に掲げてゐるもので一つとして婦人の問題をも含んでゐないといふものはない。一體無產政黨は被搾取者として共同の立場に立つ全無產階級の問題を提げて立つ政黨であるからである。

然し何分にも、婦人は未だ、政黨に加入することを許されてゐないのであるから、將來協力してやつてゆかうとするには、この治安警察法第五條に依る制限の撤廢が、婦人としては最も急を要する問題であらうと思ふ。政綱の中にある普通選擧制の徹底といふ中には、當然婦人の參政權を含んでゐるのであつて日本勞農黨としても極力この方面にも努力する筈である。

なほ、陸にあるわれ／＼は、とかく海上生活者の問題をおろそかにし勝ちであるやうに、男子であるわれ／＼には、婦人の問題に就いて果して最も緊切な提案をもつことが出來るかどうかこれは甚だ不安なことであつて、わが日本勞農黨としては、むしろ積極的に婦人側からいろ／＼な婦人に關する問題に就いて案を提出して貰ひたいと思ふ(談)

共働主義の理論

岡本利吉

世の中で一番六箇しいことは何でせう。生活?、嘘です。生活は一番やさしいものです。だのに、世間では、生活が六箇しいとか、困難とか、生活難とか云ひ、立派な人が、生活の爲に墮落したり、犯罪を冒したり、自殺したりなどします。生活は困難でせうか。いゝえ。生活位、容易なものはありません。其證據に、無智文盲の山男でも、漁夫でも、立派に生活してゐるではありませんか。鳥獸でも生活してゐます。本當にそうでせう。それなら、生活ほど容易なものはないではありませんか。それだのに生活難、なんといふ馬鹿々々しい泣言でせう。

だけれども、本當に生活難ですよ。給料が前借になり、ボーナス迄が借金の方へ取られ、何といふ癪に觸はる生活難でせうよ。嗚呼、鳥が浦山しい、獸が浦山しい、山男が浦山しい、など夢を見ることもある程に、生活には脅かされてゐます。働かざれば食ふべからず、といふ意味は、働けば食へるといふ保證ではありますまいか。働きたい、食いたい、だのに、働けない、食へない、其が生活難の根元であります。

鳥も獸も、山男も漁夫も働きます。だから生活難を知らずに食へます。困難は、本當の困難は、食ふことにあらず、生活以上の、人間となることであります。それは六箇しい、だのに私共は、人間の入り口の生活で、はたと行詰り、働けず、食へず、生活難などと云ふてゐます。愧しい、全く愧しい、鳥獸の王でなくて、ひよつとすると、鳥獸にも劣るか知れません。

生活難の原因は、資本が意張る社會となつたからであります。資本が意張るのなら、まだ聞へてゐるが、資本の所有者が意張る世の中となつたからであります。そうして横暴にも資本の所有者が、資本は俺のものであるから、資本の使用は俺の自

由だと、勝手を云ひだしたからであります。

普天の下、率土の濱、王土にあらざるはなしと云ふたのは、土地は、田でも畑でも、山でも海でも、王様の管理する萬民生活の源泉であつて、鳥にも獸にも解放され、誰もが專用を頑張つてはならぬといふ聖人の教訓であります。其時代には生活難などなかつたのであります。

金儲けの上手な實業家が資本を溜めました。誠に結構なことであります。が、何時の間にか、結構が結構でなくなりました。資本を溜めた金持は、安價に土地を買占めた。家を建てた。工場を作つた。汽船を作り、鑛山を堀つた。誠に有りがたいことであると、我等は感謝してゐます間に、何時の間にか有り難くなくなりました。安く買占めた土地を、金持は我等に貸して呉れた。地代は安いので、相變らず有り難いと思ふてゐますと、だんだん地代を上げた。不平を云ふと、いやなら家を毀して立退けと怒鳴られる。ちつとも有り難くなくなりだしました。金持の家を借りてゐる者も其通り、家賃をだん／＼上げられる、工場で雇ふて頂いた我等は、賃銀を下げられたり、解雇されたり、汽船の運賃は高くなり、鑛山へ行つても、何處へ行つても、資本家の云ひなり放題な條件で働かねばなりません。資本家は次第に勞働を商品と見だし、若者を安く雇ふて、妻子のある老年者を高給で雇ふことを中止する。生活難が初まりだしました。

資本家の製造した物は、高價でなければ賣らぬ。問屋と仲買人と、立派な店舗を構へた小賣屋とが、お世辭は善いが、粗惡な品物を高く賣ることを考へてゐます。地代や家賃を値上げしたり、工場で勞働を商品扱にしたり、店を立派に飾つて惡い品を高く賣つたり、そうしたことを平氣でする人が、益々金を儲けて、益々意張り出しますが、そうしたことを罪惡と感ずる正當な我等は、さあ大變であります。落伍して生活難に直面せねばならなくなりました。

本來容易な生活が、一變して最も困難になりました。働いても食べない。稼げば貧乏が先廻はりする。稼がずに、働かずに、楽をして、不正を計畫するのみが、金持になり、王土へ繩張りして、使はすと使はさぬとは、俺の勝手だといふ。不正漢が莫大な資本を積んで、小資本の者を壓倒してしまう。働くには、活きるには、膝を屈して不正な横道者に従はねばな

らぬ。生活は困難を通り越して、良心の反逆となり、人格の侮辱となり、自己否定に迄で、不愉快が亢進しつゝあります。

消費組合は、生活を取戻さうとする運動であります。共存同榮といふ新しい標語の下に、萬人が勞働することができ、勞働さへすれば、必らず食へる當然の生活組織を取戻さうとする愛國濟民の運動であります。

資本家に意張られたのは、我等が無自覺であつたからであります。我等が商人といふ資本家の厄分にならず、應分に資本を持ち寄り、我等の働く組合を作れば、自分で働いて製造し、その製造した物を分け合ふて生活するに、何の束縛がありませうぞ。之を共働の組織と云ひ、資本は組合で持つのであるから、別に資本家と云ふ意張る人物の厄介になる必要はありません。之を世界に於ける産業組合即はち、コオペレーチブ運動の根本理論とします。

コオペレーチブの共働組合では、互に資本を出し合ふて製造し、其製造を分け合ふて消費し生活しますから、消費組合とも譯します。共働組合には莫大な資本がいりますが、中々其資本の全額を持ち寄れるものではありません。それで消費組合を作り、小賣商人の儲ける金高を組合が儲けて之を蓄積し、組合の資本を殖やし、それで住宅から工場から農園から汽船から植民地まで拵らへる計畫になつてゐます。之が消費組合運動の目的であります。

消費組合の理論を、經濟學の上から見る時は、今日の經濟學の根本原理に、根本的の革命を與へます。其事は更めて申上げる機會もあらう。考へ物の題みたいように、其一端だけを暗示して置きますから、善く皆さんで考へて下さい。考へる所に、本當の理解が湧きます。讀んだり聞いたりするばかりが、決して能ではありません。

考へものの題みたような暗示と云ひますのは、今日の經濟學の原理は、需要供給でありますが、共働主義の消費組合經濟では、賣買の交換が根本原理であります。之を根本に考へて行きますと、今日の經濟學は、徹頭徹尾書き換へなければならなくなります。

農民運動の展開と農村婦人の組合に於ける地位

平野學

（一）

去る十一月二十三日突如として日本勞農黨創立趣意書が發表されるや我が國の社會運動界は時ならぬ波紋を繪がき大衝動を捲き起した。この日本勞農黨の靑天の霹靂的出現に依つて最も重大なる影響を蒙つたものゝ一つは日本農民組合であらう。日本農民組合は、現在二十二縣聯合會、七百八十八支部、八萬一千七十五人の組合員を有し、それは啻に我國の農民運動界に於いて最も重要なる地位を占めてゐるばかりでなく、わが全無產階級の戰線に於いても中心的勢力を把握し、主動的役割を演じつゝあるのである。さきにわが勞農大衆多年の要望であつたところの勞農總聯合を提唱した主唱者は日本農民組合であつた。また農民勞働黨以來わが無產者政黨結成の爲めに嚮導的地位に立つたものも實に日本農民組合であつた。更に今回の日本勞農黨の主要構成分子も亦日本農民組合である。

我國の農民運動はそれが單に無產者的立場に立つ人々の間に於いて刮目されてゐるばかりでなく、苟しくも社會問題に多少の關心を持つほどの人々の間に於いては最も重要事象の一つである。と同時に日本農民組合はわが社會運動界に於ける花形である。日本農民組合のこの階級的行動、共同戰線への飛躍的進出は過去一年有半に於ける農民運動の急速なる成長を物語るものである。

現下の農民運動は、在來の農民を直接に搾取し束縛する封建的諸條件の撤退卽ち改良的經濟運動から更に展開して階級的

政治闘爭への進化を示してゐる。それは運動の方向轉換でなく進化である。日本農民組合機關紙「土地と自由」の創刊號を見ると「地主を苦しめ、地主を倒せば小作人が良くなると思ふは大なる誤りである。地主あつての小作であり、小作あつての地主であるのである。互に協調し、相互扶助せねばならぬ」「地主と小作は出來るだけ理解の下に協調一致して自家の福利を增進すると共に、國家の生産の增加と安定を期せねばならぬ、而して玆に農民文明は建設され、國家は益々健全になるものである」と農民組合創立當初の指導精神を明示してゐるが、大正十五年度大會の宣言を見ると「農業の疲弊は資本主義發展の必然の結果にして、農村の振興と農民の解放とは一つに係つて資本主義經濟組織の改造に在る……地主階級の攻勢及び欺瞞的懷柔策に對しては勇敢に抗爭し、更に小作料を合理化し、耕作權の確立を期するは勿論治安維持法、治安警察法並に農民運動取締法令の徹廢に努力し……之れを要するに吾等の運動は先づ當面農民の不安を除去し、將來の理想的新農村の建設の爲めに着々其準備を進め、軈て全無産階級の完全なる解放を期するに在る」と宣言してゐる。之れ等はもとより文書に現はれた形式的表面的行動目標に過ぎないが、而かもなほ我等は之等の宣言の中に、飛躍的に展開せられた農民運動の精神を伺ひ得るし、また實際的行動の上に於いても幾多の發展性を指摘し得るのである。

（二）

農民運動はその闘爭形態より見て、またその發展性より見て都市勞働者の勞働運動に比較して階級性把握の點に黒白を附する愚を爲し得ないのであるが、農村婦人の運動は未だ初歩的階級にさへ到達してゐないのである。それは實に啓蒙期的努力も拂はれてゐないと見られねばなるまい。巷間常に所謂婦人問題に關する高級なる諸論説を見るが農村婦人の運動に關しては、路傍一介の人として目殺されてゐる觀がある。もとより運動そのものゝ上に於ても、何等の農村婦人の統一的組織的努力は形成されてゐないのである。

農民組合内に於いて婦人の問題が公然なそして正式な討議にのぼつたのは、同組合の十三年度大會に於いて、「今後は婦人の組合加入を極力勸誘して大會代議員に婦人選出をはかる件」が議題とされたのが初めてのようである。今當時の大會議事

錄に依つて見ると、提案者は「農民運動に於いて婦人の力の必要であることは幾多の爭議に於いて十分認められてゐる。この婦人を戸主と共同させる爲めに組合に加入せしめ大會には代議員を選出する樣にしたい」と說明し、それに對して「次回大會にはなる可く多くの婦人代議員を選出したい、それ故に婦人に徹底的農民敎育をすることを附加して可決されたい」との要求を爲してゐる。もとよりこれは大會の議事錄によつたゝのであるから頗る簡直で農村婦人運動の辨證法的必然性もまた組織的敎育の具體的方策も伺ひ得られないのであるが、今日未だ組合內に婦人部の確立さへも見ない點よりして、農村婦人運動が組織的勢力たり得るには可成りの努力と精進とが要求されるのである。昨十五年度農民組合大會に於いても「婦人部確立」の件が討議された。しかし婦人部確立の件は遂に殆どその重要性を認められずに來た。この時の委員と代議員との應答を見ると「婦人部には何故代議員選出權がないか」「婦人部は現在確立せずまだ全國大會も開いてないから省いた」「將來はどうか」「將來は出されるでせう」「婦人部が全國大會を開くようになる迄出されないのであるか、各地方の聯合會に於いて婦人部が確立せられてゐる所は如何」「全國大會が出來る迄と委員會で決定しました」と。現下の農民運動に於いては、組合內に於いて婦人は代議員選出權もなほ與へられてゐないのである。然し農村婦人の運動もその辨證法的必然性に基づく發展が期せられるであらうがその方法論の提唱は現下の最も緊急なる問題の一つであらう。



正月いろ／＼

大竹清子

正月がまたやつてくる。日本の正月は殊に慥しく怖しいものゝ一つに數へられる、鬼が來るとか蛇が來るとか、さてはばか／＼しいお歳暮のやりとり。私はかうしたものから暫く離れてゐた、日本の正月には暫く御無沙汰をしてしまつてゐた。

赤が來るとやら、白が退却するとやら、日本の兵隊と赤軍とポン／＼やり出したとか、混亂の中にピストルの音と共に過したヴラジボストックのお正月も三、四たびは重ねた、それからずつとのして行つた先は、赤露の都モスクヴ、そこでも私はいくつかのお正月を迎へた。

一九二四年を迎ふる時、私はたつた一人、ペトログラード（滞在中にレニンが死んでレニングラードとなつた）のロシア人の家族の中に居た、一九二四年の正月程私にとつて感銘深いものはない。

神經質なモスクヴからみれば、街こそ立派なヨーロッパ式だが、極めてゆつたりとした古都であつた。人間までが鼻毛を抜くモスコウ人よりは、ゆつたりしたレニングラードの人達の方が好きであつた、だがある日たつた一度私はレニングラードで外套のポケットのものを掏られてあつけにとられたことがあつた。

今は博物館になつてゐる宮殿を初めとし、エレメタージ繪畫館、レニングラードに最も美を添へるネバ河、その中にいかめしくたつ例の要塞監獄は繪の樣である、要塞の中も今は一般に見物を許してゐる、要塞監獄の中にはいくばくの男女革命家の血が塗りこめられてあるか、私はゾッとして牢番の齒の抜けた爺さんを見た、爺さんはもう何年となくこゝに居る。獄中の人達が飛びおりて死をはかるので、階段の横へ一杯に綱を張つたとも言つた。東洋人――否日本人らしい背の低い人もこの一番隅の部屋にゐたよ、と言つた。もう夕暮であつた、私はマッチを擦つて壁を眺めた、だがいたづらにきれいに何もかもが掻き消されてあつた、ある人はその壁に日本

字で「大庭」と書いてあつたとも言つたが、私の行つた時にはもうすつかり掃除をして、こゝもケロリとした何事も知らぬげな博物館と化するときであつた。

狹くて鼻もつかへさうなモスクヴからみれば、レニングラードは相當に見物場所もあり考へさせられる事も多かつた。立派な銅像も澤山ある、モスクヴでは皇帝アレキサンドル三世やエカテリーナ女皇などの像は、下ろしてどこへ持つて行つたか分らないが、レニングラードではある銅像の臺の周圍に、「世界一のばかやろう」などゝ書いてあるのがあつた。

私は雪の中をこれらの見物をして歩きまわり、今でもトルストイの家といへば、誰も知る大きな家の七階へと歸つて行くのであつた、モスクヴへ行くまで離れた事もなかつた夫と、かうして遠く分れて新年を迎へるのもしんみりした身輕さを覺えさせた、少しも寂しさ悲しさを覺えなかつたのは、私の住んでゐた家庭に滿足があつたからであつた。

この家の五人の子供はみんな私になついた、珍しがつて私を引張るので、親達は見るに見兼ねて、

「アタケサンの體が毀れます」

と言つて叱つた、

その頃日本人と交際するさへその筋を怖れてゐたのに、この家の父親はしいて私を引止めたのである。お正月をこゝでしてどうか長女に日本語を敎へて貰ひたいといふのが願ひであつた、私は自分のためにも便利なので喜んで居る事にした。

クリスマスの樹が枯れてストーヴへくべられる樣になつた頃、子供達はみんな學校へ行き出したので、晝は誠にしづかで私の勉强もよく出來た、退屈になると私は、エレベーターの動かない七階から、コツ／＼と下りて街の方へ行つた、出掛ける度にこゝの父親は、どこへ行くかと問ふた、彼は私を預つてゐるといふ觀念から、それを問ふらしかつた。零下十五度になるとレニングラードでは小さい子供の學校は休みであつた。だから寒い日には家の中が賑はつた、モスクヴの方はずつと寒さは强いけれども、濕氣がないせいかづゝとしのぎよい、子供達もそれのために學校を休むなどゝは聞かなかつた。例によつてひるの退屈な時に、私はネプスキー通りへ散歩に出た、私はそろり／＼と滑りころばない樣に歩いて行つた、それは午前十一時頃であつたか、或はもつと遲かつたか、町の角々へ貼り紙をしてゐる婦人勞働者があつた、バケツの中へのりを入れて、長い柄のついたもので手早く一枚づ

ゝの紙を貼付して行くのに忙がしさうだつた、貼つた紙はと見れば、黒枠に入つたレニンの立姿で、その周圍に何かべた〳〵と書いてある、人々は皆足を止めて口々に想ひ〳〵のことをしやべり立てゝ行つてしまふ、それにしてもレニンはいつ死んだのか私はちつとも知らなかつた、うちへ歸つて問ふても「へーさうですか」と答ふるのみ誰も知らなかつた、長女が學校から歸つて來たから問ふたら、彼女は昨夜乘つた橇屋から聞いたと答へた、一國の領主の死もこんなに扱はれてゐるのみか、私が散歩の歸りにみたら、さつき婦人勞働者によつて貼付された許りのレニンの肖像が破つてあつたのさへあつた、いかに何でもお膝許のモスクヴではゴルキー村から死骸を運んで葬式もしなければならないのだから、人心はこれ程冷たく動かないでもゐられまい、とは思はれたが、私達の生活には何等の變化もなかつた。長女と私とは相變らず机で向ひ合つて語學の勉强、次女はピアノの稽古、書齊では兩親が協力して著書に忙しがつてゐた、母親がうつ豆をはぢく樣なタイプライターの音は、書齊から絶え間もなくもれた、時々この家へは子供等の從兄が來てマンドリンを掻き鳴らした、滑稽家であるその若者は立派な紳士であつた、私は常に感じてゐたことは、貧と戰ひながらも、何といふ理想的な家庭であらうと。家庭の中には長幼の順序があつた、矢張り父親が一番にたてられてゐた、父親は母親を尊敬し愛してゐた子供達も皆性質のいゝ正しい子達であつた、今でもぢやが芋を主にしたまづいものを食べて居るが、食卓では時々、みんながひもぢくて親は子を見て涙に泣きぬれたといふ革命當時の話が語り出された。水道が凍つて水が出ないと下の方の家まで長男が貰ひに行つた、スチームがぬるくて水の樣な時に、うちぢうみんなは綿入外套を着てふるえてゐたが、長男が家の管理者の所へお使ひに行くのを悦んで引受けた。

その日も長女と共に私は言葉の勉强をしてゐた、すると書齊の方から父親の呼ぶ聲がする、

『ウラ――ツみんな集つてビールを祝へ』

長女と私は何事だらうと飛んで行つた、が何のことだつたか私にはさつぱり分らなかつた、

『アタケサンにもビールをおつぎなさい』

私は言はるゝまゝにコップを高くさし上げて飲みほしたがみんなはまだふう〳〵笑つてゐるのみで、祝ひの原因を聞かせてはくれない、そのうちに長女が私の耳許へきて云つた。

『便所の水が出る様になつたんです』
なる程便所の水が出ないので汚いことを思ひ出したが、今度革命後はじめてこの家の便所の水が今日から流れる様になつたのださうな。父親は、私を見ると豪傑笑ひをして、
『日本にこんなお祝ひがありますか？』

春まつ心

吉原初子

私は冬の夜のこがらしが好き。
もう皆がうらぶれて、いてついた大あめつちの闇の底から冥府の使ひが、手をさし延べそうな、じやくまくたる寒夜にうたふあの聲は、私にとつてはなつかしいなつかしいものなのだ。
えんまこほろぎの聲が、細々となる。
せきれいが、みそさゞいが、勢こんで飛びおりる庭石に、木蓮の赤い實の弾ぢけたのが、胸をそゝるころほひ裏の松林にいつもと變つた風の聲を聞くことがある。
おや。どんな忙しいなかでも、私の心に、ゆとりができかける。
が、まだ／＼秋の風だ。百舌鳥も啼る。柏葉が青々と茂つてゐる。
まだね。まだ時でないもの、しかしなつかしいものを待つ心の片隅には、あの峻烈な寒氣の脅威がちくりと胸を刺す。
柑子が色づいて來た。舊暦神無月だ。
雲の色がつめたくなつて、大粒な氣まぐれ雨が降るようになる。
よう／＼おまへに逢へる。私の胸は高鳴りを覺える。久しぶりね、ほんとに久しぶりね。ほつとして、愛するものゝこわねを、心耳を澄してむさぼりきく。
私はあの聲を、なんとかたとへて見たい。
ほめてほめてほめちぎつてやりたいが、餘りにそれはなつかしいものゝ聲である。いとしいものゝ相である。
唯默念として、木枯と、相語らふ。
飄々として、曠野を渉りゆく、なつかしの木枯よ。相打ち相戰ふをことゝする人の世にとつて、なんと崇厳な默示であ

らう。

人生はさみしいものだと思つて見れば、それは寂寥極りないものであらうとも、まことに人の世は淺ましい爭鬪の巷なのだ。右の頰を打たれたからには、左の頰を打つてかへすほどの意地がなければ己の面目が保ちかねる修羅の世界だ。共に傷つき、血みどろになつてもなんとかしてやらなければ、自分の本分が立たないように考へる、そのくせ意氣地のない人の世にくらべて、私はあの寛裕な、木枯をいとほしむ。

音なくて天驅りゆくなれば、耳傾くる人もなからう風の音を、冬の象徵に、なくてならぬものゝ一つと美化するものはまことに風をたわめ、風をこばむ木立である。地上の萬象である。天馬空をゆく風の本能にとつては、建てる家屋は横はる丘陵は、凡てもが進路の障害である。自然界の草木一として、仇敵ならぬものはないのである。風は行路をさへぎられて、其處に一つの樂を生む。世人は木枯と名づけ、詩人は筆硯を新にして、その訪れをなつかしむ。然りと雖も、風そのものゝ本來より見れば、木枯と名づけらるゝその聲は、進路における一大蹉跌にほかならぬのだ。苦悶のうめきにほかならぬのだ。

けれども誰があの聲を敗者の叫びと聞くものがあらう。

更け行く夜半眼を閉ぢて風の音を聞く。

遠くでつめたいうなり聲がする。近くで渦卷きかへす音がする。チチチ、梢のあたりでものごゑがする。カラカラコロコロまろんでゆくのは何の木の葉か。あるは高く、あるは低く緩やかにまた急に、怒濤の叫びを聞く、谷川の流れを偲ぶこともある。しかもその凡てもが、渾然一體の交響樂になりきつてゐる。

なつかしの木枯よ。

もの思ふとてもなく更くる夜半、しみ〴〵とその聲を味ふにつれ、冷えきつた私の胸に、ほのかなぬくみが點晴される。

ゴオリキイの名作「どん底」にあらわれる貧しい錠前屋の妻のアンナは、陰慘な地下室の息づまるやうな空氣の中に、今瀕死の病態を横へて、餘りに苦惱に充ちた過去の恐怖から、死んでからも苦しいことばかりでせうかと巡禮ルカに尋ねるのであつた。ルカは靜かにそれを慰めていふ。

『なんのお前。來世に苦みなぞあるものか。おまへさんはこの世でさん〴〵苦勞をしたそのかわり、あの世では樂しいことばかりだよ』ルカは窮りなき神の愛と、天國の樂さとを說

くのであつた。アンナはルカの言葉を信じて安心するとともに、苦しい現實にすら猶愛着を感ずるやうになつた。

『あの世に苦みのないものなら、私はもつと生きてゐて、もつと苦んでみたいやうな氣持がするの』

と言つて爺さんを驚かしたのであつた。

米の飯と太陽はついてまわるものと昔の人は教へたものだが、善人でもしひたげられてゐる、いくら働いても食へない人達がゐる、しかも働かうにも仕事のえられない不合理な現在が私達の前に展開されてゐる。忍苦から歡喜の世界が生れるものと功利的にも考へきれない世の中だ。が、私達はどんな悲境におかれても、心の底の底には、何かしらまだ絶望しきれぬあるものを認識することがある。それは信仰と名づけるほどのものでなくとも、困憊しきつた胸底には、なほ一點の微香がひそむでゐるものだ。

神の懐は廣い。私達がまことにさみしさに徹し、苦さに徹しきつて、苦惱をわが物とすることができた時、そこにはかつて知らなかつた靈光のほとばしりを見る、幸福のきらめきを見出すことができるのだ。

殼をぬげない蛇は死んでしまふ。人類の生みの母たる女が消極的な因循姑息な封建思想から、建設的雅量をもつことによつて、人生改造の曙光は擴大されねばならないのだ。私は木枯を愛する。わが進路を支障する萬象に、己が姿をシンフオニーと化し飄々として、めざす彼方へたゆまざる、悲しみを歡びへ、蹉跌を更生へ、障害を善智識として、刻々に錬磨し、毒をしも良薬とめでうるほどの、勇猛心をなつかしむ。

豊橋に行つたとき私は仲原なか子さんの家に泊つた。美容術師である仲原さんのお家では、旅の疲れやら何やらで私が未だぐつすり眠つてゐる頃から次々とお客が見えてゐた。私は、友人たちがそれぞれの職業に忙しさうに立ち働いてゐる姿をみるのが大好き。

今日も永樂町の停留場でタイピストの山下さんと一緒になつた。年内に、羽織と長襦袢を縫はなくつちやならないのよ。それに會社はギリ〳〵まであるの、忙しいわ。と云つてほんとうに忙しさうに早稲田ゆきの電車に飛び乗つて行つた。昨日はほや〳〵の女學校の家事科の先生二瓶秀子さんが訪れて見えた。いろ〳〵私には珍しい先生の生活振りを聞きながら、地方の女學生の知識程度や、社會や家庭やに對する考へなど、どんなものなのかしら聞かせて貰つた。（おく）

× × × ×

視覺享樂

生田花世

自分の視野に入つたこの世でのいろ〳〵の人間の眼、それを私は書き上げて見よう。勿論數かぎりなく私は澤山の眼を見た。千であつたらうか萬であつたらうかその眼の數はかぞへつくせない。そして私はこの世での經驗を、それら無數の眼によつてかたることさへ出來る。私を——この一人の女性をかこむ人間社會はいはゞこれらの眼によつて形づくられてゐたとさへいひたい氣がする。私がたのしんだのもそれらの眼のためであり、私の苦しんだのもそれらの眼のためであつた。心强いとおもへたのもある人の眼であり、悲しいとおもつたのもある人の眼であつた。眼は私には花のやうに匂はしいものであつたし、さそりのやうにいとはしいものでもあつた。私に對する親切がそこから來た、私に對する侮辱がそこから來た。露のやうに、星のやうに、又太陽のやうに眼は私の心にふりかゝる。あやしききわみのものよ、眼よ、忘れんとするも忘られがたきものよ、眼よ。

眼の最初の挨拶をそして愛撫を私は母親からうけた。(誰れしもさうであるやうに)この母親の眼はうるんでゐた。それは多分愛情の霞のためにさう見たものであらう。私は母の眼をいつもうつとりとした色合ひで思ひ出す。私は母のかみそりのやうな冷たい光を思ひ出すことが出來ぬ。氷のやうに冴えてゐるものも思ひ出すことが出來ない、三角になつた眼を思ひ出すことが出來ない。母の眼は春の夜のおぼろ月のやうにおぼろ〳〵に私の心の窓をてらしたのである。勿論、私は、母の眼が所謂、美しい眼であつたとはいひ得ないものである。しかしその眼は十分に溫かく十分に寛大でそしていたわりの心にみち〳〵てゐた。二重まぶちの少しくにぶい乳色の感じ

に私の姿をその瞳孔にあり／＼とうつし出す眼として彼女の眼が浮んでくる。賢明だとはいへないものだつた。それは單に柔和なものだつた。だから私はぬるま湯の中でジャンプジャンプ行水するやうにその母の眼の中で幼時の生活をすることが出來た。」ところがこの母の眼はよく大粒の涙をこぼした。泣かないまでもよく／＼涙ぐみによつてぎら／＼しやすかつた。私が父にしかられるやうなことをした時、（たとへば山遊びして夜おそかつたり大切なものをこわしたり、人のものと自分のものとの判別がキチンとしなかつたりした時）母の眼が夕立のやうに變徴を呈したものである。又私が熱が出て、寢込んで了つた時などにも、いたましい位その眼は心配の色をたゝへてさしのぞき／＼冷たい水で手拭をしぼりつゝ涙ぐまれてゐた。又、私が何かいいことをして家の人々にほめられてゐる時には、その眼はいかにまるまるとほほゑんだらう。『この兒が男の子だつたら』といはれたりしてゐるとき、母の眼は他愛もなくとうけてゐたのである。眼に入れても痛くないといつたやうに。

母の眼の次に私はあの眼を思ひ出す。はじめて何といふいい男の子だらうと氣に入つたある男の兒の眼を。それは私の十二三の時の眼のおもひでであるが、どういふわけでさうも深く私の視覺をつよくとらへたものであつたか分らない。『眞夏の夜の夢』の森の妖精の女王がある花の汁をそゝがれて、めさめた時の最初の人を戀ふといふロマンチックなこと――それを思ふ位に私は、こちらにむいてくれるその男の兒の眼がすきであつた。もうその男の兒の顔はおほよそ忘れてゐる。何しろ三十年も昔のことであるから。そして勿論その男の兒は亡くなつてから十何年になる。それだのにその男の兒の眼は私の眼の中で生きてゐる。母の眼が私の眼の中で私をなぐさめ溫める時、その男の兒の眼は私の眼の中で白い文鳥のやうにとびまわる。淸らかな冴え冴えしい眼である。少しはにかんでゐる眼である。淸淨で、そして上品で、そして溫かくて可愛らしい。ああ、忘られがたい眼よ。

もう一つずつと後になつて私の心に深いえにしを結んだのはある人の女の兒である。私はその人の家へ女書生になつてゐたことがある。そして傍、その年生れの女の兒のお世話をしたのである。牛乳の仕度、おしめの面倒それから泣くと外に抱いて出て椽側を歩く。ある時は、五月の紅い花のさく花ぞのを抱いてぢつとたたずんで……。さうした時々に赤ん坊

は私を見まもつて、ニコ〳〵と笑ふのである。『おお、いい兒いい兒』とゆすぶると、クル〳〵笑つてそしてそりかへるのである。寢かせておく枕元に座るとぢつと見上げてくれる、右へ行けば右へ、左へゆけば左へとその女の兒の眼は私の眼の中にしたひよつて來たのである。

あんな風に私を見まもつてくれた眼の持主が、今ははるかに、どこかで、二十歳の春を迎へるであらうことを考へると私の眼は故しらぬ愛の涙にうるむ。どうか幸福に、幸福にとは私がその眼を思ひ出すたびの心からの祈りである。

無給の妻

在米　田中　綾子

「無給の妻」と云ふ見出しで、或婦人が政府當局に歎願書を送つたと云ふ記事がアメリカの一新聞に出てゐた。

『自分は妻である。妻なる故に終日の勞働を無給でしなければならない。自分の隣家の婦人は、一月に百二十圓の月給を貰ひ、且つ、室代、食事代の支拂を受けてゐる。自分は、必要の爲の一仙をさへ得られないではないか。而も、女中ならば自由に立去る權利があるが結婚と云ふ契約にはそれさへ許されてゐない。法律は、妻に月給を支拂ふ事を夫に要求し、若し夫が其義務を履行せざる時は離婚を正當と認めるべきである。』

それに對する政府當局の返答は、

『現在に於て、夫たるものは妻に月給を支拂ふべしと云ふ法律は制定されて居ない。然し、次の如き法律は夫の上に課せられてゐる、即ち『妻を養ふ事』である。單に必需品を提供するのみならず、相當な生活を支へる收入を有してゐなければ夫たるの資格はない。若し夫が彼の義務を果さない場合があれば、法律は立派に離婚を默可してゐる筈である。』

更に之に對する反撥として

『扶養の義務とは甚だ曖昧な言葉である。それは夫の都合によつて種々な意味に變形されるから夫にのみ有利な言葉である。妻は從來の通り夫の爲にのみ存在し、且つ無給で働かればならない　現在の法律は甚だ不公平である。』

日本でも、半年ほど前だらうか、婦人公論の誌上で、現代思想家二十餘名のそれについての意見が述べられてあつたと思ふ。

金錢によつて男女の權利の平等を證明するとは最も資本主義の惡影響を受けた思想である。夫と妻の關係を、資本家と勞働者と同樣に取扱ふとは物質主義の最も惡き影響である、男女の獨立が、金錢に頼らなければ安心がならないと云ふ考方だ。

妻は夫の附屬物なりと云ふ在來の道德觀から妻に月給を拂ふことの反對説が割り出されてゐるのではない。資本主義社會は、義務と強制で縛られる『ればならない』で

（四二頁へ續く）

職業婦人勞働婦人と政治運動

勞働運動が單なる經濟運動から、政治運動へまで進んで來たことは、いろ〱な議論はあるとしてもとにかく、勞働運動がより實際的になつて來た必然の結果であると考へられる。

同じ意味で、勞働婦人の運動、職業婦人の運動、その他無産階級の家庭の婦人の運動もまた次第に政治的色彩を帶びて來るであらうと云ふことは當然豫想されることであらう。然し、今日では無産階級的な立場に立つた婦人の政治的集團としては、大衆教育同盟に屬する有志の婦人、サラリーメンユニオンに屬する有志の婦人らに依つて、形成されやうとしてゐるものがあるばかりである。(これは勞農黨を支持するものである)

婦人は未だ政治結社に加入することを法令で禁ぜられてゐるのだから、政治的な實際運動に携はることは出來ない。從つて、婦人としては、未だ實際的にこの運動に入ることは困難であるとしても、とにかく勞農黨が、少數ながらもこれを支持する婦人の集團をもつてゐるといふことは、大きな强味であると云はねばならぬ。

社會民衆黨日本勞農黨に於ても未だ具體的な運びはついてゐないらしいけれども、婦人の政治的自覺、政治的團結に對して大きな期待と提案とを持つてゐるだろうといふことは、政黨それ自身の成立動機から考へても、それはきはめて當然のことであるやがてはそれらの政黨を支持する婦人の大衆が生れるであろうといふことも、私たちは豫測するにかたくない。

すでに勞働組合に組織されてゐる婦人はその組合が支持する政黨に所屬するであろうことは云ふまでもないことであるが、未だ組合に入つてゐない勞働婦人や、職業婦人乃至は家庭婦人らがどの政黨を支持するであろうかと云ふことは、新しい政治運動に就いてばかりでなく、新しい意味での婦人運動の今後の活躍を決定する上にも大きな問題であると思ふ。

が、何よりも私たちの恐れるところは、今日やつと生れたばかりの諸無産政黨が、その内部的な抗爭や排擊に、ともすれば婦人大衆の立場を忘れ勝ちになつて、蹶起となつてゐるうちに、やがては大きな政治的勢力となるにちがいないこの婦人大衆が、その資金の豐富な、そして傳統的勢力の大きな既成政黨に蠶蝕されてしまひはしないか、といふことである。

各國の婦人參政權實現後の形勢をみるにつけても、この杞憂が單なる杞憂であつてくれるやうに、と、私たちはねがはずにはゐられないのである。(おく)

三一頁よりつゞく

行動する社會である。夫と妻の關係にも亦義務を植えつけやうとするのか、妻が夫から月給を貰つたとすれば、妻は既に夫の金錢奴隷である。夫婦は如何なる社會の中でも愛によつて結ばれるものだ。その愛がないならば、その夫婦關係は速かに解散するべきである。

前に揭げたアメリカの新聞記事は、アメリカの一面の思想をよく物語つてゐると思ふ。すべてが金錢づくである。『妻を立派に扶養するだけの收入がなければ夫たるの資格がない。』とすれば、妻は夫に結婚するのでなく、夫の收入と結婚するのだ。家の爲の結婚、財産結婚をあれ程罵しておきながら、知らぬ間に舊來の思想に落ちこんでゐる。こんな沒個性的な思想が、新しい思想として、新聞の論說に麗々しく揭げられるアメリカである。

消費組合聯盟の出來るまで

笠原千鶴

袋張りから始まつた共働會

大島共働社(正しくは單に共働社)が關東消費組合聯盟の芽生の組合である樣に、共働會は大島共働社の前身であつた。其の事業は袋張りであつたが理想は既に共働組合運動の正しい的をねらつて居た。初め企業立憲協會といふ『資本と勞力との對等共立關係を確定すること』を其の綱領の第一に揭げてゐる團體があつた。その出版部で『新組織』といふ機關紙を發行し岡本利吉氏がその主筆であつた。前から岡本氏は熱心な外國の共働組合の研究家であつたが遂大正九年七月一日(註一)岩本庄藏、出合信美、小久保吉郞、田中正太郞の四氏と共に共働會を設立した。事業は岩本庄藏氏個人の事業である製袋業を基本とした。岡本氏は私財の殆んど全部を之に提供した。共働會に入會するものは『條件として自己の私有財產は少くとも半額以上を基金として寄附することを要す』(註二)と云つてゐる。その意氣込の素晴らしいことが分る。共働會の綱領は八つあつてその一は『本會は企業立憲協會事業部の所屬とし共働自治の產業を經營することを以つて目的とす』とある。

『資本主義の改造』『企業の立憲自治』を目指して純粹に勇猛に起つた此の運動が、間もなく金の問題のために危く破壞されんとした。(註三)即ちある者は拐帶逃走した。或者は品物を持出して賣つた。最初の綱領に連署した同志の二三も、か丶る事情で去つた。共働組合運動が、生れて間もなく、か丶る試に遇つてゐる。此の運動に殊に『人』が要求せらる丶ことを思ふ。

(註一)新組織二卷十一號四頁、(註二)同上二卷八號二〇頁 (註三)同上二卷十二號五四頁參照

共働社設立

大正九年十月二日、城東勞働者の一團は純勞働者組合を組織した。十月下旬純勞では企業立憲協會の岡本氏に外國の運動、思想に關する講演を依賴した。此より先『新組織』誌上には三號許

り引續いて英國消費組合運動の紹介が出て純勞の人々中に之を讀でゐる者があつた。講義の六日目（十月二十六日）岡本氏は共働購買組合設立の計畫を述べた。純勞の顧問平澤計七氏を始め聽講の人々は之に贊成した。それから數回の設立協議の末十月廿九日回章を廻して組合員を集めた。所が希望者は多くて豫定人員の二倍に上り、抽籤で決定した所もあつた。其夜直ちに創立總會を開き役員も決定した。役員は米、砂糖、薪、炭、仕事服、紙等を仕入、十一月七日の日曜に開店した。當日は賣上一百三十六圓七十二錢、九日は九十圓五十二錢十一日は三十圓八十一錢（註一）　場所は企業立憲協會の大島支部の建物即ち現在の聯盟本部。開店は一週間に四日、役員が工場から退けてから開く。五圓の出資に對して十五圓の掛賣りを許して、月二回勘定であつたが回收率は良好であつた。初め配達はしてゐなかつたが後には、するやうになり幹部が交替にして居た。

その內に關根義男といふ老人が來て、配達を專任とした。共働社で精米を初めたのは翌年の三月であつた。賣店の一部に岡本氏の出資で一馬力の精米機を据えた。玄米は深川多木町の高梨半造商店から持つて來、精米作業は大堀伊佐美（日東製綱に失職して）が擔當し尙配達、販賣等に專任となつた。

以上は共働社が生れ出て其の內部の運營的方面であるが、對社會的方面に於ては實に重大なる事件が持ち上つた此はひとり共働社一個の事件といふよりは日本の消費組合運動にとつて重大事件であつた。それは日本鑄鋼所の勞働爭議であつた。岡本氏の述べる所を聞いて見やう。

「共働社を組織した有志は日本鑄鋼所の職工を最多數とし其次には大島製鋼所の職工を多數とした。大正十年三月日本製鋼所に勞働爭議が勃發した。共働社を疑ひ純勞働者組合を疑ふ思想團體と都下の各勞働團體は爭議の成行を注視した。爭議は未然に防ぐことも出來た。爭議は勞働者間の內訌に始まつた。共働社の幹部となる者の中には日本鑄鋼所の伍長を勤める役付職工があり彼等は勞働組合を破壞して共働社のみを隆盛にしやうと試みた。其の試みは工場の不景氣による資本家の工賃引下げに策應する爲めであつた。此の場合に於ける私の行動は注視の的となつた。私は率先して亂れんとする職工の團結を恢復し大勢を爭議に導いた。共働社の幹部も之に同意した。もし反對

に共働社が一時の小成を夢みて勞働組合を裏切る役付職工に迎合すれば、どうであつたろうか。恐らく我國の消費組合運動は長く社會運動の大勢から排斥せられ共働社も長い歲月の經過の間に支離滅裂となつたであろう。共働社の幹部會は日本鑄鋼所の裏切者を除名し逆し純勞働者組合を激勵して爭議の決行に加擔したのである。爭議が起つた後でも尙ほ疑惑が附き纏うた。協調的に資本家と妥協するかも知れぬと監視の眼が着いて居た。私共は爭議に關する責任を感じ、勇敢に奮鬪すると共に爭議團を激勵して刀折れ矢盡きるまで當時の爭議記錄を破る三十日間の罷業を繼續せしめた。共働社は爭議團員に對し可能的の物質援助を爲した。かうしたことから共働社に對する疑惑は漸く除かれ積いて大島製鋼所に擧動化する迄の大爭議が起り、之に種々の援助をなすに及び消費組合共働社は勞働階級の味方であることが都下の勞働團體に認識されるに至つた。』(註二)

此は新興消費組合にとつて忘れてはならぬことである。共働社の第二回總會(五月七日)席上で以前共働社を快く思はなかつた人々からも、此に好意を持つ演說をする人が多く出た。九年十一月一日から十年四月三十日までの第一回の決算報告には

購買高總合計	六、〇七七、〇七
利益金合計	六六三、三七七
利益金所分	
事務費	一六五、二九五
勞働運動基金	一二一、五四一
配當金	三六四、六二四
第二回總會費	一一、九一七
合計	六六三、三七七圓

此の半期中重要なる會務は前述の爭議關係で日本鑄鋼所に爭議基金として七十圓を寄附してゐる。(註三)

(註一)新組織三の一、三十七頁、(註二)社會問題講座四卷岡本氏の消費組合論、(註三)新組織三ノ六、二十頁參照

共働社月島支社

大正十年の春から設立準備中であつた勞働者の信用組合『勞働金庫』は三月三日附で設立認可が下つた。(註一)設立者中には平澤啓七、岡本利吉、北澤新次郎、布施辰治、植原悅次郎、戶澤仁三郎の名前が見へてゐる。がその資金の主要部千余圓が志立氏から融通されたものであつた。此の千余圓の中大部分は月島勞働會館設立に使はれた此の勞働會館には純勞の支部、勞働金庫の支部、勞働日曜講座等が開かれた

奧田工場の職工川本六助、小田電氣工場の遠藤金次郎外多數の勞働者は共

働組合の設立を計り、三月一日、月島支部を創立した。(註二)月島支社は暫くしてから場所が狹隘なため同地一號地の小學校裏に家屋を借受け月島共働會館を作つて其の中で事業をした。當時大堀伊佐美氏が主任でやつてゐた。

月島支社は震災で千八百圓の損害をもたらして、なくなつた。

(註一)新組織三ノ三、四十頁及同上三ノ四四十五頁、(註二)同上三ノ四、十四頁

大阪共働社

東京に於て企業立憲協會が共働社設立を企畫してゐる頃、同協會の大阪支部に於ても、其の設立が講ぜられたがものにならなかつた。大正十年六月初旬岡本利吉氏平澤計七氏等は大阪に下り、各勞働團體の幹部と消費組合設立について議した。當時大阪、神戸には空前の大勞働爭議が起つてゐて計畫は容易に進行しなかつたが汽車製造會社の樋口信一氏等の熱心な支持者が出て來て、九月一日の第一回締切日には組合員は尾崎支社を除いて廿九名であつた。當事の鬪士の顏觸れは樋口信一、京谷長一、後藤一士、成瀨善三、德田政太、那須善次、大久保德久、西川善助氏等がある。

初めは會計整理に、記入洩れなどが出來て、その不足分を岡本氏や京谷氏が代償したり、ドシ〱無頓着に賣つて限度を顧みないこともあつたりして當時大阪の共働社に缺點として殘り、仲々取り除かれなかつたのは、出資の限度を越えて確實な者には、ドシ〱物品の供給をしたことであつた。無產者の消費組合で必要な資金は何所から來るか。其は結局に於て組合員より外に來る所はない。それには『出資限度の物品供給』が一原則でなければならぬ。幹部は之を大阪共働社に希望してゐたが、大體に、之は守られて行つた。然し當時の大阪共働社の決算を見るとその會計整理上の訓練に欠けてゐる所のあつたのが見へる。

然し大阪共働社は後に組合員三百名を算し總同盟に屬する大阪汽車會社の勞働組合が中心團體となつた。然し大正十三年の秋、爭議が起り、之に從つて共働社も二分して對抗することゝなつた。即ち仕上施盤部の樋口一派と、勞働組合の牛耳を取つてゐた製罐部の山本一派とが對峙し、樋口一派は支部族數本を擁いて總同盟を脫退し、山本一派は會社側と妥協した。山本一派は掛代金を支拂はず共働社に反抗し出した。岡本氏、加藤勘十氏等之を、まと

めるべく努力したが遂に無駄で樋口氏は會社を出、組合員は三分ノ一に減じ現今では只名目上の大阪共働社となつて了つた。之が勞働組合によつて起つた共働組合が爭議によつて、ひどい影響を受けた最初の記錄である。聯盟は電話架設に要した約千圓の金が貸してある。消費組合運動の分離、脫退、加入、合併等が、常に實質的な經濟關係の併うことは、勞働組合の離合と本質的に異る點である。

參考　新組織四ノ二、十九頁、同上三ノ十、二頁、同上三ノ十、二二頁、同上三ノ九、二十頁

東京共働社

東京共働社は現今聯盟のみならず本部に於ける新興消費組合中で、最も出色あるものであつて、本誌は別にその記事を載せる豫定であるとの事故、玆には簡略に書いて置く。小石川の砲兵工廠には官營の購買組合があつたが之に、不滿を抱いて居た陸軍現業員組合の幹部、廣田金一、靑山義男、池端彌一、八田常雄氏等は、大正十年十二月十五六日頃、小石川水道町丑天神門前へ共働社の第一配給所を作つた。此が東京共働社の發生であつて、幹部は每日のやうに遠い大島まで品物を運びに行つた。獨立したのは十一年初頭に於てであつた。

第一配給所創業半月の成績

配給金高	四〇五、八四五
物品殘高	九〇、二七
物品購入高	四三九、五三
差引剩餘金	五六、五九五
內請經費	一九、九三

（參考新組織四ノ二、十九頁）　圓

消費組合聯盟

『勞働者の消費組合』（此は當時大島共働社の配給箱車に書かれた文字）は今や、大島共働社及その月島支社、大阪共働社、東京共働社の三個となつた。共同購入や共同宣傳を爲して消費組合聯盟と呼ぶことになつたのは大正十一年の一月か二月頃（註一）からであつた當時『聯盟の上へ何といふ頭字が付くか未定であるが』と云つてゐるが、此の頭字が聯盟大正十五年度大會第四議案として附議され『關東』の二字が加へられた。聯盟として配給額が統計に表はれ始めたのは、大正十一年八月からであつて八月には二千四百圓を數へた

以上『消費組合聯盟が出來るまで』で云はゞ第一期創成時代の聯盟を簡單に述べた。次には此が、急激な膨脹をして『關東消費組合聯盟となるまで』が書かれねばならぬが機を見るにする。『關東消費組合聯盟は大正十六年を對內的には事業財政及會計整理等に、對外的には、宣傳教育全國的新興消費組合の結成に努力する意氣込でゐる。あらゆる社會運動に於て、自己を犧牲にして、働いて居る多くの人々を見る。かゝる人柱の上にこそ新しい時代が建てらるゝことを思ひ感激に打たれるのである。

街に暮れる心

伊福部敬子

街にゐて暮れる日は淋しい、
子をつれて街に暮れる日は淋しい、

晴れやかな冬の日が
街燈の灯に暮れそめると
そろ〳〵と友情の窓が閉される
見知らぬ人々をまで待つと開けひろげ
てゐた門の戸を
人人はかたくとざして
家毎の愉しい灯のもとへより集る、
見知らぬ人の上など打ち忘れて。

今日も
歩きなやむ子を叱り
髪の毛をむしる背の子の手を邪険には
ねのけながら
とぼ〳〵と、とぼ〳〵と
わかりにくい友達の家を探ねて
探ねあてぬに暮れた。

道は昏く、
頑なにとざした家々の戸は、不幸な心
に答へてもくれない

あゝ、夜霧の冷たさは、たよりない母
の胸にさみしくしみる

「坊や、お腹が空いたかえ、
おうどんをたべようか、十錢のウート
があるんだよ」
「えゝ、お父ちゃんはどうしたんだら
うねえ」

この頃中歸つて來ぬ父よ、

三人の魂が、闇の夜道にふるへてゐる
のを知つてゐるか、
夕暮時の、家々が友情の戸をとざす時
の、その樂しいつどひのためだけにで
も、私達に歸つて來てほしい。

映畫と女性

（その一）

新居格

この題でこの範圍でこれからいろんなことを書いて行くつもり

この問題はいろんな點から考へられると思ひます。第一に、映畫は若かい時代に親しまれてゐます。若かい時代の兩性はいゝ意味にでも、よくない意味でも影響をうけてゐます。その影響は都會では殊に大きい。都會から離れるに從つて影響は少くなつては行きます。實際、都會に於ける青年男女の映畫にたいする知識には驚かされます。先達て死んだルードウイツヒ・ヴアレンチノーに手紙をやつて、彼から來た簡單な返事の手紙をお守札のやうに、肌身を離さないでゐると云ふ女學生さへ東京には居るとのことです。ヴアレンチノーのやうな美貌をと云ふ場合にヴアレシヤンと若かい女性達の一部の間には云ふのだともきゝました。全く大したことです。ラモン・ナヴアロとかジヨン・ギルバアートとかベン・ライオンまでに就いても同樣なのかも知れません。昔は、東京の下町の娘さんたちは芝居のことが詳しくて、音羽屋がどうの、播摩屋がどうのと、役者の藝風や、癖や、得意に就いていろんな知識があつた如く、今時の若かい娘さん達は、その代りに外國の映畫俳優に就いて、實にいろんな知識があるやうに思はれます。私共の若かつたときには幻燈でした。映畫が行はれ出した時でも動く幻燈位にしかお恥かしい話ですが感じませんでした。筋のちよつとした興味だつただけだと思ひます。だが映畫そのものも進んだ、そして觀衆も素晴らしく進んだ。若かい男性も同樣、外國のスタア女優の異動なぞは激しいものらしいですが、その消息を實に細かく知つてゐるには驚きます。近頃になつて、何と云ふ女優が賣出して來たとか、誰は其うち屹度スタースになるであらうとか云ふことまでも知つてゐるらしいのです。女性美にたいする好尙でもすつかりちがつて來てゐます。

映畫が若かい時代にもつ影響には、いゝ點もあります。わるい點もありませう。二つともを同時的にうけて行く

のでせう。どちらにしてもそうなつて行く趨勢が時代的なものらしいなら、止むを得ないでせう。そうした見方から現代の映畫社會學とも云ふべきものを組み立てることも出來るかと思ひます。

映畫が現代に影響をもつことは、日本計りではありません。殆ど世界的です。特に米國の若かい女性なぞが如何に映畫女優になることにそゝのかされてゐることであるか。社交女性の間にもその影響が著しい事をベアトリス・ウイルソンがかの國の或映畫雜誌に書いてをりました。『何故、社交女性が映畫に於いて失敗したか』と云ふ標題でした。金持の女性が衣裳、自動車、寶石、夜會、觀劇、旅行、贅澤の數々をつくしても、尙、飽足らず、映畫のスタアになつて王女に扮したり、新聞雜誌に書き立てられたり、多數のフアンに持て囃されたかつたりしたいために活動界に身を投じたいのですが、實際やつてみると容易なものでなく、多くは失敗すると云ふ意味の一文でしたが私の云はうとする點は、兎に角、米國なぞでも映畫が如何に若かい女性を誘引しやうとしてゐるかと云ふ一つの傾向についてでした。

日本でも田舍の女性で活動俳優になりたさの一念で不分別にも家を飛び出す人もあるやうです。米國の映畫界の內幕もきつといゝ加減のものでせうがそれでも監督には勿論俳優にもいゝのが大分居ます。が、日本の映畫界には第一見識のある監督が殆どゐない。撮影所の方針はひたすらに儲け主義、その監督と、撮影所の方針と、いゝ加減の俳優とが三位一體をしてゐる限り、私には大して期待はもてないと思はれます。

以上のやうなことを云ふと、映畫はプロレタリアが排斥しなければならないことになりますが、私はプロレタリア階級が無視してならないものは映畫だと思つてゐます、プロレタリアの主義に立つて撮影所をもち、そうした見識の監督の下に作品をこさへることは當分駄目でせうが、プロレタリアはその立場から、映畫を評論し選擇する必要は大にあると思ひます。所が今の若かい女性、特に、女性の見方はアメリカの女性が牽引されるのと同じ意味で華やかな人生、歡樂的な空想、甘美な戀愛模樣、エロチツクな生活行進曲、まあ、そんな興味が多いのではないでせうか。だから、華やかな役をやる美貌の男女優が徒らに持て囃されるのでせう。そんな點のみで映畫に興味をもつ若かい兩性なら、それはブルジョアの雰圍氣を無意識に肯定してゐることでそんなのは全く詰らない。エミールヤニングスの『最後の人』やジョゼフ・ステルンベルグ監督の『救ひを求むる人々』を選擇するならまだ話せる。更に眞に映畫を人生的に生かし切らうとするなら、その方法はあるべき筈だ、と思ひます。若かい時代が映畫にたいして見識を以つて見るやうになつて貰らひたいと私には願はれるのです。

幸福な朝

坂本茂子

毛糸のセーターに毛糸のズボン
毛糸の帽子
まるまつちい二人の子供は
霜柱をさく〳〵とふみ乍ら
出勤する良人の前後にまつはつて
鬼子母神の下の石段まで
今朝も良人を送つて行きます。

『失敬！』
『失敬！』

炬を守る者

大阪職業婦人聯盟　豕田　清眞

相變らず病床から一言、一ヶ年を回顧して私達小さな者共の聲を培ひ育てん爲に熱心に、指導し後援下さつた皆樣に對し、何一つとして御期待に添ふ事の出來ませんでした遺憾を玆に愼んでお詫び申上ます。

甚だ消極的な辯明のやうでございますが實際を申しますれば、聯盟と致しまして特筆すべきものは幹部の病院生活とでも申さればならないやうな悲壯な事實の中に目下もあります。發起人の一人である野中一四（舊姓井上）さんは、お勤め先きの關係から一時聯盟を退かれ、再びお歸りになる事を管はれたまゝ五月から病褥の人となられました。さうして、目下も京都醫科大學病院にあります。谷口釜枝さんも三ヶ月餘の病院生活を續け、餘りに多事多用で無理をしつゞけて來ました私も、二回に亘る病院生活をお恥しい事ではございますが致しました此間期待は期待を裏切り、凡べての抱負を淋しく葬り去つて來ましたが、たゞ一つ皆樣の前に聲明出來ると思ひます事は、聯盟

門の所でふり返つた良人と子供は
みんな揃つて玄關の私に
擧手の禮をします。

晴れやかな良人の笑顏でした。
今玄關でお互の財布を出し合つて
やつと電車賃しかなかつた事も
乾度忘れてゐるのでせう。

やがて手や足を眞赤にして
歸つて來るであらう子供のために
私はたつた一枚の十錢銀貨を握りしめました。

の根本精神には何等の暇も隙も出來てゐないといふ現實でございます。

既成の婦人運動とは少々方向を異にして未だ餘り手を着けられてゐなかつた未開の經濟的荒野を目差し、開拓の使命を擔つて出かける者には、幾多の障害は當然すぎる程當然な事として、覺悟の前に受け入れればなりませんが、とにかく生命懸けの根氣が最後の解決と勝利の鍵を握つてゐるのだと信じてをります。

お互ひの熱は火となりて全山未踏の地に燃え上りました。然し此の炬が里の人々の爲に、安全な文化の電熱として利用されるか、恐ろしい山火事となつて凄慘な焦土と化，か、これは炬を守る者の責にあります事は今更の問題ではないと考へますが、世間では往々斯うした烟のやうな、性質のものは最初は物珍らしさの好奇心から、珍重がられますが、時日の立つに連れ稍ともすれば人々の記憶からさへも遠ざかつて忘れられやうとします。そして、私たちの持つ熱と勢ひが、夫等に反比例して熾んになりまして或ひは風を送り、雨を以て此の炬を守る者を奮起しないではゐられぬやうに仕向けてくるのではありますまいか。眞に考へる可きは此の際ではないかと思ふのでございます。

時事漫筆

奥むめお

この雜誌の讀者にも、大分農村の婦人がある。編輯者として、それらの農村の婦人からのお叱りや注文が一番身にこたへて聞かれる。

「六かしすぎるといふこと。」長野縣のある讀者から、毎號、兄いさんから振假名をつけて貰つてよんでゐる、と云つて來たときには胸を抉られるやうなつらい思ひがした。今月號から振假名をつけるやうになつた、につけてもすぐに思ひ浮べるのは、あの手紙のことである。

それから、春につけ、夏につけ、今は田植えで忙しい、養蠶で眠るひまもない、刈り入れはすんだけれど、籾ずりや何やで又當分本を讀むひまもない——と云つた工合に、一年中忙しい勞働の連續である農村の婦人のたよりをうける度毎に、私はいつも考へさせられてしまふ、私たちの階級では女はみんな忙しいのだ、忙しすぎるのだと考へてみたりもするのだけれど。

さき頃、各無産黨へ、婦人に對する具體案を問合せたとき、實は私は日本農民黨からのものに一番多くの期待をかけて待つてゐた。なぜなら、農村に於ては婦人もまた立派な生產者であるもの。農村の家庭こそほんとうの共稼ぎの生活であるもの、婦人の働きを無視して、今の農村の生活を私たちは考へる事が出來るであらうか。農民黨としては婦人の問題に就いてもつと考へてゐるだらうと思つてゐた。

それにしても、農村の婦人よ、今、おかれてゐる女の立場について、考へてみなければならない事が多いではないだらうか。

×

無產政黨がわれて四つになつた。日本農民黨はとにかくとして、あとの三つの勞農黨、日本勞農黨、社會民衆黨では、各々、今後婦人大衆をいかに敎育し、如何にしてその政治的勢方を生かしてゆくかに就て、種々の對策が對究せられてゐるといふ。

婦人は未だ治安警察法第五條で政治結社に加入することが禁ぜられてゐる。從つて、いづれの政黨にも、表むきで參加することが出來ない。これは婦人側にとつて大きな不幸である——私たちは一日も早くかうした不利な政治的地位を打破するために闘はればならないのだ——

旣成政黨は、婦人に對して只の一度もその誠意を示したことはなかつた、否、婦人をも被支配者として、被搾取者として、大多數の無產者と一緒くたに、政治圈外に放り出しておいて顧みやうともしなかつたのである。

今無產政黨の擡頭につれて、被搾取階級としての私たち婦人は、その解放に就いて多くの望みをこの新政黨の活動につないでゐる。

ところが三つに分れ、四つに分れた各無產政黨は相互に、理論討爭に終始して大同の中に小異を樹てゝ、ともすれば無產者としての現實の問題を打忘れて互に皮肉り、互ひに排擊し合つてゐるかに見える。無產政黨の將來の活動に期待することが大きいだけそれだけ、私たちの嘆きは深いのだと云はればならない。

數年に亘つて、いはゆる婦人運動の圈内にゐて私は、婦人同志の間の離合集散に少なからぬ關はりを持つて今日に來た。

新しい團體が生れては消え、消えては又生れて、いろ〳〵のことを私に考へさせられる場合が多かつた。

近頃思想團體勞働團體の間に、左翼、右翼、中間派等々の立場の相異から來る互ひの排撃が大分はげしいやうである。近ごろでは婦人界にさへそれらの爭ひの波紋が漸くにひた寄せて、未だ社會運動としての第一歩をすら踏み出しかねてゐる婦人運動の上にも、或る對立關係を強いて作らうとする努力をみるやに考へられるものがある。

さういふいろ〳〵な消息をよそに、近頃消費組合運動の人たちと近づきを持つやうになつて、私は協同といふ言葉のもつほんとうの意味を理解できるやうになつたやうに思ふ。

婦人たちばかりで話合つたあとに心の底に滓のやうに殘るあの妙にゆううつな氣持あの氣持を心に思ひ出しながら私はいつもさう思ふ。たさえ雜談でも、消費組合運動にたづたはつてゐる人たちと話しあつたあとのあの快い感激は一體どこから來るのであろうか、と。

×

來月號から、この「婦人運動」もずつといゝものになろうと思ふ。新居氏のいゝ智惠を折角しぼつて頂いて、私たちもうんと馬力をかけて編輯の上に力を傾けてみたいと思つてゐる。

一體、四年といふ長い間つゞけてやつて來たけれど、いつも經營と、いろんな事務的な雜用におはれ通しで雜誌の內容にまでは全く手が屆きかねてゐた。やつと基礎も固まつた。この上は內容を吟味して、いゝものを作りたいと思ふ。この雜誌の上に大きな期待をかけて力を添えてゐてくれられる讀者や贊助員の人々の今日までの御好意に對しても、いゝものを作り上げなくてはならぬと思ふてゐる。

云ふまでもないことであるけれど、いはゆる通俗的な婦人雜誌とは異ふのであるから、私たちがすゝめても、かういふ雜誌には目もくれないといふ婦人も尠からずあることは、これはむしろ當然の話であろう。

然し、一度この雜誌を手にして、「今まであてもなく求め〳〵てゐた自分のよみものが、今初めて自分の前に現はれて來た」と喜びを傳へて來てくれる人もすくなくはないのである。さういふ人たちのためにも――さうして私は、未だ知られざるところに、さういふ同志が澤山に手をさしのべてゐるのを知つてゐる――本誌の存在の意義を完うするために努力したいと、こゝに誓ふものである。

蛇の家(小品)

若杉鳥子

蛇屋敷の小母さんは、街で有名な美人だつたが子供がなかつた。

小母さんは大へん私を愛してくれたので、少女時代の半分を私は小母さんの家で過した。

小母さんの家には、色々私を惹きつけるものが多かつた。錦繪や、草ざうしや、昔の版畫や、蒔繪の三味線が土藏の二階の黴臭い青白い光りの中で、私を古い藝術への憧憬に誘つた。

邸の中も相當に廣かつた、白蓮の大樹も稻荷の祠も四季に咲く櫻も、みんな私には自分のものゝやうに親しかつた。

一枚のお盆にも南畫風の枇杷の彫刻があつたり、小戸棚の扉にも、今は見られない冴えた色の風景の版畫等が貼つてあつた。

それは小母さんの趣味といふよりも、先夫の遺していつたものなのだつた。然し小母さんだつて才人でもあり優れた理解力もある、さうした趣味を持たない事はない、すべて生活は典雅らしく見えてゐた。

然し街では極めて評判が良くない。

血も涙もないユダヤ人のやうな女だ……と。

成程、小母さんの美しさには冷たい光りがあつた。鼻梁にも段がある、上瞼にも稜があつて、お能の面のやう

に整ひ過ぎてゐる。けれど私自身には何處までも優しい小母さんで、背中が痒ゆいといへば慈母も及ばない位根氣よく搔いてくれるし、何一つ惜しみはしない。その美しい優しい小母さんがどうしてユダヤ人のやうなのか私には解らなかつた。

多分その家の富が、地所や家作や貸金の搾取によつて成され、今も爲されつゝあるからだらうと考へるより仕方がなかつた。

そしてその家には雄と雌の大蛇がゐるといひ傳へられてゐた。『蛇のゐる家には金が殖える』こんな事をいはれる位、代々富んでゐたが、不思議に代々子供のない家で、小母さんも何處からか貰はれて來た娘だつた。

そして今の夫は三度目の養子で、いつでも此處の家には三角關係の鬪爭が絶えたことがなかつたといはれてゐた。

私もどうかしてその大蛇を見たいものだと思つてゐたが、決して姿を見せた事がない。小蛇や山かゞし靑大將ならば、實際この家では珍らしくなかつた。

ある夕方、ふと私は臺所の棚を見上げると、白いお茶碗のやうなものが、も少しで棚から落ちさうに載かつてゐるので、

『ばあや棚からお茶碗がおちると危いッ』

と私はいつた、老婢は默つてそれを支えやうとして手を差しあげた、そして薄つ暗い中でギャッと叫んだ、お茶碗は老婢の手から、ぬらぬらと脫けて棚の上に消えてしまつた。

それは白い蛇のお腹だつたのだ。

臺所の肉挽き機械の中に渦卷を捲いてゐたり、便所の大きい石の手洗鉢の中にゐたり、方々に遊んでゐた。

この家に五十年近くも勤めてゐる老婢は、

『蛇は此の家の主だから大切にしてやらなければなりません』

と口癖のやうにいつてゐた。それが小母さんの第二の夫が巳の年で第三の今の夫との間の三角關係に惱んで死んでしまつたからだといふ迷信からだつたが、全くこゝの家では蛇がゐても成べく大きい聲を立てゝ騷がない事になつてゐた。もし騷ぎでもしやうものなら、

『ナニ、蛇なんか珍らしいものか、家は何處よりも壁が厚いから巣喰つてゐるのだ』

小母さんはさういつて怒るし、小父さんは血眼になつて出て來た。蛇と見ると小父さんはまるで陸軍の假想敵みたいに殘忍性を發揮して遁げる奴を追求した。

蛇を地べタに叩きつけて石炭酸をぶつかけて、蛇が苦悶してのた打つのを快く眺めてゐるのだ、そして白い腹を仰向けて最後を遂げるまで痙攣するやうな表情をして見てゐる小父さんの顏は全く凄い。

またある時は、倉の横に積み重ねた薪の下に這入つたのをまで、下男を招んで引つ張り出した。檣のやうに高く積んだ薪を、一束づゝ根氣よく取りおろして、遂に蛇を引き摺り出した。そして極めて慘虐な殺し方を選んだ頭部を小父さんは自分で握ると、尾の方を下男に持たせて、二人で力まかせに引きちぎつてしまつた。その血塗れの手を二人で井戸端で洗つてゐる光景は、かなり凄かつた。

蛇は小父さんにとつて滅んだ過去の戀敵と假想されてゐるのださうだつた。

けれども蛇は殺しても殺してもこの家になかなか絶えない。ある日、母屋と離室との間の渡り廊下の下の古池に、鰻の子の小さいのが髮の毛のやうに縺れてゐた。

『うちの旦那さんはまあ、あんなに澤山の鰻の子を買ひなさつて、どうしやうとしなさるんだらう』

さういつて老婢が心配してゐると、その鰻の子は、夕方になると、一匹も殘らずゐなくなつてしまつた。それは鰻ではなかつた。

その何百とも何千とも知れない蛇の子供達が、それぞれに處を得て成長して、自分達人間と一緒に知らない中に生活してゐるといふ事は、何たる怪奇なロマンチックな興味のある空想だつたろう。

殺しても殺しても、小父さんの懸敵きは祖先傳來の部厚な壁の中ではぐゝまれてゐるのだつた。雨上りの日などには瓦がするとこの蛇の家は、古いのも古いが必要以上に屋根が高くて勾配が急だつたので、綏んで、ド、、、、、と古瓦が往來に落ちた。全く危險でこの家の軒下には近寄れないと通行人から抗議が出たので、流石にユダヤ人といはれる小母さんもたまりかねて、小さな茶室を立てゝそれへ移つた。

蛇屋敷が改築に宛てられたその夏は、毎日毎日壁の崩れ目から蛇の出ない日はなかつた。箕で掬ふ程蛇が出たやうに大工や佐官が吹聽した。けれども遂にこの家の主といはれてゐる大蛇は姿を見せなかつた。改築後は直ぐに貸家とされたが、この家はもう一つ不思議な事には、風も何もない靜かな日でも、天井で不思議な物音がした。ミリミリとかミチミチとか、生木の裂けるやうな音がした。傳說のある處へもつて來てそれは全く事實だつたから、聽く者は妄想を描かないわけにいかなかつた。

『私の家に大蛇がゐるとか、先の旦那樣の死靈が崇つてゐるとかつて、そんな馬鹿げた話があるものか、この家は生木を用ひて建てたから、それで今でも自然と狂ひが生じて裂けるのだ』

小母さんはさういつて世間の妄想を打ち消さうと努めてゐた。

私はとう〳〵、大蛇も見なければ小母さんのユダヤ人らしい冷酷さにも出逢はないでしまつたが、今では蛇もゐられない位に、小母さんの經濟政策が、自然を壞して、籔や林の跡 貸家が建ち並んでゐる。

高臺の家

新居格

T夫人はその日が素敵にすが〳〵しい心持になれた。五月の空が晴れてゐて、庭の木の葉がさわやかに鏡に映つた。薄い藍色のセルを着て、薄化粧をして鏡の前に立つたときには、自分の姿にほゝえみかけたいやうな、投げキッスでもしてみたいやうな氣持がした。何故そうなんだか自分でもよくは分からないのではあるが、落ちついた幸福と言つたやうなものが何と云ふことなしに泌々と味はれるのであつた。

「あの奥様　S様の奥様がゐらつしやいました。」

と女中の豐が云つた。

「そう、では、お通し申上げてお呉れ。」

と快く答へた。

「こんなにも氣持のいゝその日に氣持のいゝ人が訪ねて呉れるなんて……」と思ふとT夫人の心は靜かな海を潮の流れに任せて帆をあげた快走艇（ヨット）の心地のやうな氣輕さが胸に躍つた。

西洋間の應接室はT夫人好みに飾ざられてゐる。清楚な薄いろのカアテンが窓に懸つて卓上の花瓶には大きな白百合が薫つてゐた。

「よくゐらしつて下さいましたわねえ。」

「これと云つて、用はありませんでしたの、たゞ伺ひたくなつて伺つたゞけなの。」

「それでいゝぢや御座いませんの。用がなければ訪ねないなんて、そんなことが私達の間にあつてなるものですか。私はそんなことはいやですわ。今日はほんとうにゆつくり遊ばせな。そしていろ〳〵お話を伺はせて下さいましな。」

「あの奥樣、きのふは教會でお目にかゝれるかしらと存じて居りましたの。でも、きのふはお出でがなかつたやうねえ。」

「はあ、きのふは參りませんでした。きのふ許りではありませんのよ。こゝんところ三四回、參りません。」

「そうでしたの、わたくしもそうでしたわ。では御同樣ですわねえ。」

そう云つて、二人の顏にも同樣の微笑が浮かびあがつた。

「奥さま、私はこう思つて居りますの。宗教は魂の問題ですから、日曜禮拜に行く、行かないは問題ではないと思ひますの、日曜禮拜を缺かさないのが篤信者とはかぎられませんわ。」

T夫人は擁護すると云ふよりも主張するやうに云つた。

「私もほんとうにそう思つて居りますの、教會關係の人達はこう申しちやなんですけれど、酒は飮まないの、煙草を吸つちやいけないのつて、無暗に形式の末に許り、こだわつて、肝心の魂の問題を忘れてゐるやうですね。形式を重んずるのは惡い事ではないけれど、信仰が進みさへすりや自然に形式にあてはまつて來るのですわねえ」

「奥樣と私とは同じ意見でしたんだわ。」

「それで同じやうに日曜禮拜を怠けた譯でもないのですけれどねえ。」

二人の夫人はそう云つて又も笑ひを投げ交はした。

五月の晴れた空は忘れな草の花の色より美しい。午前十時ごろの太陽は明るい光線を惜氣もなく部室のなかに投げ込んでゐた、窓際の籠の小鳥が啼いてゐる。

二度目の來客が豐によつて告げられた。そして一葉の名刺がT夫人の手に渡された。

「奥様！Aさんがお見へになつたのです。いつかあなたにお話し申上げてた、機智に富んだ面白い方よ、お引合せしやうとかね〳〵思つてゐましたの、ほんとにいゝときいらしつたわ。」

間もなくAは長大な身體をそこの應接間に現はした。

「しばらくでした。お變りもありませんか。」

「有難うございます」ほんとうにしばらくでしたわねえ。Aさん、どうしていらしつて。」

「田舎へ行つてたのです。」

「羨ましいわねえ、自由なお身體なんですもの。」

「あんまり自由でもないですよ。羨まれるには値しません。食ひ詰めての都落ちなんですからなあ。」

「でもいらつしやつたら何時でもどこへでもいらつしやれるのですもの、自由ぢやありませんの。」

「さう云へばそうです。それは動くこと位はどうにかなるものですよ、しかし、不自由な田舎へ行つて、コッコッ器械的な飜譯をしてゐたのですからねえ。」

「あなたのお好きな佛蘭西小説の飜譯？」

「どう仕りまして、變なものなんです。多分あなた達には薩張り興味のなさそうなトドミアンツの消費組合論。」

Aがこう答へたとき、T夫人は急に言葉を轉じた。

「御紹介しますわ、Aさん。この方がS夫人！あなたの愛讀者ですわ、わたくし同様に。」

「初めてお目にかゝります。どうぞよろしく。」

とS夫人は挨拶する。

「私こそ、どうぞ。」

Aも應ずる。T夫人はS夫人と話合つてゐた宗教論をAに向つて繰返した。そして云つた。

「Aさん、あなたはそれをどうお考へですの。」

「僕ですか、そうですね。僕も大體お說には賛成ですなあ。だが、もう少しハッキリ云はせて頂くなら、僕は無宗教ですよ、マルクスの云ふやうに『宗教は阿片だ』とまでは强く云ひ切ることはしませんが、今の教會が一體ブルジョアヂーの歸屬になつてゐると思へるのが癪なんです。教會は寄附や獻金を神の御名に於いて要求します。教會維持のためには止むを得ませんがね。だが貧乏人はそれも十分には出來ない。僕なぞもこれで元は一つぱしクリスチヤンでしたがね、食へなくなつて獻金も出來ないので日曜禮拜にも行かなくなつて仕舞つたのです。背教者と强く云ふ程でもありませんがまあ矢張、背教者ですなあ。で、あなた方の只今の議論は現在の僕には不必要の部類に屬するのですよ。僕は何事によらず崇拜の心理を極端に排斥します。尤も今の教會が僕の唯物史觀的立場を僕の納得するやうに何とか說明してでも呉れるならば、また教會に出かけないとも限りませんがね。」

Aはそう云つて二人の夫人を見た。隅には不興氣な二つの顏があつた。S夫人は窓の方に顏をむけてゐるし、T夫人はその晴れやかな顏に云ひやうのない曇りを見せてゐた。

丁度、そのときである、第三番目の客Bが來た。Bは世に云ふプロレタリア文士であつた。だがBが T夫人を訪ねたのは上品な飜譯家で同時に詩人でもあるT夫人と文藝上の話をしに來たのでないことはすぐ分かつ

た。挨拶がすむと右の小脇に抱かへてゐる大きな黒鞄を開けて、刷物らしいものを取り出したからである。

「私の用件はこれです。これをお讀み下さるとよく分かりますが、一言で云ふと、消費組合に這入つて頂こうと云ふのです。」

と云つてＢは消費組合の理論を簡單に說明した、生產者から直接に消費者へ、と云ふ事から中間の商業主義の寄生蟲存在と云つた風なことを。

「そうですか、でも考へさせて下さいましな。」

とＴ夫人は云つた。

Ｂは言葉を續けた。

「今更說明申上げる程でもありませんが、われ〳〵の組合は新しい社會理想をそこに置いてゐる譯です。詰りは社會主義の理想ですがね！」

社會主義ときいてＴ夫人は再び美くしい眉根を寄せた。そして云ふのである。

「あの、鳥渡お訊きしますが、私の家は無人です。主人は不在勝ですし、子供が學校へでも參りますと、跡は女中と私と二人きりになるのです。あなたはお用聞きをひどく攻擊なさいましたけれど、お用聞きは賴めば水も汲んで行つても呉れますし近所に火事でもあると早速駈けつけて來てくれますわ。消費組合はそうしたことをして下さいますか。」

「そう云ふ譯にも往きませんがね。」

Ｂは弱つたと云ふやうな表情をしてそう答辯をした。Ｔ夫人は得意になつたかの如くに傍觀者のＡには思はれた。Ｔ夫人は言葉をつゞける。

「經濟組織のことはよく分かりません、が、私はやつぱり傳統主義者です。古るいのですわねえ、そんな事がす

きなんですから。」
Aは默りこくつて夫人の言葉を聽いてゐた。
「奥さん、それはあゝたがプチブルジョア氣質だからですよ。その日、その日に何一つの心配がないからですよ。だから、そんなことが云つて居れるんだ。御自分の好ましい感覺だけに、趣味だけに卽いて居たいと云ふ氣にもなるのです。淸麗な文化婦人！だがね、お氣の毒なことにはあなたは合理的な社會展望を知らない。花は何んだつて美しいのでせうねえ。わたしは何だつてこんなに幸福なんでせうねえ、これがあなたの自問自答かも知れない。御結構な御身分で、そんな人達には消費組合だと云へば何と云ふケチな散文的なと云ふことにもなるんでせう。」
――默りこくつて莨をすぱ〱喫かしてゐたAの頭の中ではこうした皮肉が廻轉して行つた。
だが、そうは思ひながらもAの言葉の意味は逆説的に投げ出された。
「B君、君は勸誘がまづいや。も少し、上手になつてから來ることだ。奥さん！消費組合があなたの趣味でないとしたらきつぱりお斷りになればいゝではありませんか。」
あきらかにはそう云つたものの、Aの心の中には無自覺な文化婦人にたいする憤慨が、かなり昂まつてゐた

AとBとは前後してT夫人の家を出た。そして或る省線のベンチで偶然にまた落合つた。そこから高臺にあるT夫人の家がよく見取れる。燃えるやうな綠葉でその高臺は蔽はれてゐた、そしてその中にT夫人の家の赤かい瓦屋根と、洋館の二階の窓が見へるのであつた。その窓の水色のカアテンもそのベンチからそれらしく淸爽に動いてゐるのが見える。あの階下の應接間で、俺達は今し方まで、居たのだなとAとBには一樣に思ひ返された。
日はうら〱である。正午間近の太陽は眩ゆい許り燦々として耀やいてゐる。だが、高臺から見下してゐるやうな窓が第一癪にさわつた。

「ねえ、B君、駄目だね。あいつらブルジョア女なるものは、物の道理が分からないね。君の說明にたいしてあんなことを云ひ出すなんて、俺は自烈たくなつたから、あゝ云つたのだよ。お斷りになつたらいゝでせうよとね」
「俺には君があのときあゝ云つた氣持はよく分かつてゐるのさ。併し實際あきれたよ、あきれて物が言へぬと云ふのはこんな場合だらうよ。全く分からないにも程がある。あれで相當物事に理解のある敎養の高かい夫人として世間には通用してゐるのだからなあ。」
「全くだ。そして五月の日永を退屈にもつかぬ宗敎論で暮らそうと云ふのだからねえ、しかしあんな女達には賀川豐彥君にでも說かせるといゝかも知れないが、君では駄目だよ。」
「俺はもうあんな奴の所へ勸めには行かないさ、てんから肌が合はないや。」
「向ふもさう云つてるだらうよ。S夫人と今ごろはね。」
そう云つてAは笑つた。
「時にB君、君はこれから何處へ行くのだい。」
「新橋驛まで行くのさ。芝の印刷所へ、消費組合のパンフレツトを取りに行くのだがね。君は？」
「俺もこれから校正に出かけるんだ。飜譯の校正がけふから出初めると云ふからなあ。それで神田まで行くのだよ。」
「それぢや途中まで一緖に行こう。プロはとかくに忙がしいや。」
そこへ、電車が來て駐つた。

新居格氏を編輯顧問に

ある日、中野の西郊共働社に集つた人たちが、

『「婦人運動」をもつといゝものにしたいものだなあ』

と云ふので、私の家に押しかけて來て下さつた、そこで編輯會議といふことになりました。

どんなにいゝ雜誌だつて、澤山の人が讀んでくれなければ、無意義です。澤山の人に讀んで貰ふためには、やつぱり中味をたつぷりにしてよいものを作らなければ駄目でせう。

私は、いつも、新居氏と漫談の内にもどんなに敎へられるところが多いかしれないと思つてゐます。その夜の編輯會議の席上で、いよ〳〵顧問に新居氏が推せんせられた時、氏も、

『ぢやあ一つ、一緒にやつてみますかな、婦人雜誌の編輯方針については、僕にもプランがあるのです』

と、快くひきうけて下さつたのでした。

私たちが自分の無力から、新居氏のいゝ智慧を臺なしにしてしまいはせぬか、とそれを恐れてゐますけれど、とにかく、第五年を迎へるけふ、この喜びをお傳へすることが出來るのを何よりと思つてゐます。

どうぞ、私たちは折角いゝ雜誌を作るやうに努力しますから、讀者の皆さんは一人でも余計の方に本誌をすゝめて、讀んで貰ふやうにして下さい。

表紙繪は、柳瀨正夢氏が快くひきうけて書いて下さいました。

二月號からは全國の書店にも出して、外のどの雜誌と比べても見當りのしない「婦人運動」の姿を(於て内容に)眺めたいものだと思てゐます。

原稿募集

どうぞ、奮つてあなたの御感想や、うたや、創作ものらを寄稿して下さい。

今月號から振假名をつける筈でしたが印刷やの方で手違ひになつて、出來ませんでした。二月號から振がなをつけます。

◇誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部	貳拾五錢	(郵稅五厘)
半年分	壹圓四拾錢	
壹年分	貳圓八拾錢	

送金法

送金は振替が一番便利です。
誌代の受取證は別に出しません。
雜誌發送を以てこれに代へます。

昭和元年十二月廿五日納本
昭和二年一月一日發行

發行編輯兼印刷者　東京市外中野町圍三二四四　奥むめお
印刷所　東京市小石川區西古川町二五　中外印刷株式會社
發行所　東京市芝區明舟町一番地　職業婦人社
振替東京六四一一六〇番


松屋の信條
弊店は常に良品本位に、流行の源泉たるを期し、品質柄合を吟味に吟味致し、御滿足を願へる優秀品を差上ける事に、努めて居ります。何卒御用命の程を御願申します。
東京
松屋呉服店
銀座

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
昭和一年十二月廿八日 印刷納本
昭和二年一月一日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動

第五巻 第一號（定價二十五錢）